

『洞谷開山瑩山和尚之法語』

示_二妙淨禪師_一 攷 (一)

東 隆 眞

Study on the “Hōgo of Tōkoku (Yokoji)-founder Keizan-oshō-given to Myōjō” (1)

Azuma Ryushin

This thesis is a study on the ‘Hōgo’ (dharma-teaching) of Keizanzenji (1268-1325) which was given to his disciple Myōjō. Until now a few scholars studied this ‘Hōgo’. But I think it is necessary to correct and to criticize these studies. My thesis’s contents is as follows: (1) Shōboji-temple where this ‘Hōgo’ was owned and “Shōbogensō-zatubun” which concluded this ‘Hōgo’ (2) the formation and tradition of this ‘Hōgo’. (3). Association between Keizan-zenji and Myōjō. (4). the organization of contents in this ‘Hōgo’ (5) the citations in this ‘Hōgo’.

目 次

はじめに

- 一、正法寺と『正法眼藏雜文』
- 二、『洞谷開山瑩山和尚之法語』示_二妙淨禪師_一の成立、伝承
- 三、瑩山禪師、妙淨と『洞谷開山瑩山和尚之法語』示_二妙淨禪師_一
- 四、『洞谷開山瑩山和尚之法語』示_二妙淨禪師_一の内容構成
- 五、『洞谷開山瑩山和尚之法語』示_二妙淨禪師_一の引用典拠

はじめに

鎌倉後期の僧で、こんにち日本曹洞宗太祖と位置づけられている瑩山紹瑾禪師(二二六八—二三三五)の法語として伝えられているものの中に、『洞谷開山瑩山和尚之法語 示二妙淨禪師』一卷がある。この法語は、数百年來その存在すら知られていなかったのであった。この法語に関する解説、研究もきわめて断片的、部分的な範囲にとどまり、簡略に過ぎるものであつて、全体的、総合的な観点からの詳細にわたる検討はなされてはいない。

そもそも、この法語は、昭和一〇年ごろ、大久保道舟博士が、岩手県水沢市黒石町の古刹、曹洞宗の正法寺において発見し、これを学界宗門に発表した。この法語は、『正法眼蔵雜文』の表題をもつ古写本のなかに収録されているのであるが、大久保博士は、その奥書きを公表したという(衛藤即応博士著『正法眼蔵序説』三三頁。昭和三四年 岩波書店刊)。

昭和三四年(一九五九)岩波書店は衛藤即応博士の遺稿集『正法眼蔵序説』を刊行し、同書の巻尾にこの法語の全文の復刻を紹介し、解説を添えた。すなわち、衛藤博士によつて、はじめてこの法語の内容の始終が一般に広く知られるきっかけとなった。

その後、つづいて本文は、『常済大師全集』復刻版(昭和四二年 大本山總持寺再版)、永久岳水著『伝光録物語』(昭和四〇年 鴻盟社刊)、曹洞宗全書刊行会編纂『続曹洞宗全書』第一卷(昭和五〇年 宗源補遺・禪戒・室中)、光地英学編『瑩山禪』第十卷法語講解(平成三年 山喜房仏書林刊)などに収録され、紹介されてきた。

(注) 右の『常済大師全集』、『伝光録物語』、『瑩山禪』所収の『洞谷開山瑩山和尚之法語 示二妙淨禪師』は、『正法眼蔵雜文』の原文が漢文片仮名混淆体であり、句読点もないにもかかわらず、漢文平仮名混淆体に改変し句読点を付している。その理由は記していない。これは、復刻とはいへ、正法寺蔵『正法眼蔵雜文』の原本に忠実ではないことになる。

『常済大師全集』所収の『洞谷開山瑩山和尚之法語 示二妙淨禪師』には、原本と対校すると誤りがある。一例をあげると全集本では、「天地の先に先立ちて、天地の後に後なるは這の者なりと知るべし、境の所を定めざるが如し」(七三六頁)とあるが、原本は「天地ノ先ニ先立テ天地ノ後ニ後ナルハ這ノ者ナリト知ルヘシ境ニ引レテ善惡ノ念ヲ起ス者業風ニ吹レテ境ノ所ヲ定メサルカ如シ」とあつて、全集本は傍点を付した一九字が欠落している。

右の点について、『瑩山禪』第十卷において、この法語の「解題」の執筆者大谷哲夫教授は、頭注を付して、原本により忠実な『続曹洞宗全書』本と欠落している『常済大師全集』本との相違を指摘している。『瑩山禪』は、『常済大師全集』本を原本としているが、これはあやまりといふべきであり、この指摘もそもそも無意味である。というのは、現存する正法寺蔵『正法眼蔵雜文』の原本を基準にして対校しなければならないのである。原本を基準にして他本と対校して、その正誤をただすべきであつて、原本を全く無視して、他の活字復刻本を基準とすることは許されない。屋上屋を重ねる誤りとなる。このほか『常済大師全集』本、『瑩山禪』本は、こまかい点で原本とことなる個所がいくつかあるので、注意を要する。

永久岳水著『伝光録物語』は、昭和四十年四月一日、鴻盟社の発行である。しかし、『曹洞宗全書』解題索引では、同書を東京教育新潮社の発行としている(執筆担当者不詳。四三一頁)。これに同調して、『瑩山禪』第十卷の解題(大谷哲夫記)でも東京教育新潮社としている。いずれも誤りである。ちなみに、永久岳水博士には、『正法眼蔵物語』の著書があり、これは一九六五年(昭和四〇年)七月二〇日、教育新潮社から刊行されている。

また、この法語の内容に関する研究、解説については、前出の衛藤即応博士の『正法眼蔵序説』のなかの「前編 第一講 序論 第二の三 太祖瑩山禪師の法語解題」、前出の永久岳水博士の『伝光録物語』のなかの「備考」と題する簡単な解説、椎名宏雄氏の「瑩山禪師に關

する三種の「仮名法語」考」（『瑩山禪師研究』所収 昭和四九年 瑩山禪師奉讃會刊、前出の『曹洞宗全書』解題索引（昭和五三年 曹洞宗全書刊行會刊）の「洞谷開山瑩山和尚之法語」と題する解題、私の「太祖瑩山禪師」第三七回（第三八回の「洞谷開山瑩山和尚之法語——妙淨禪師に示す——」（1）（2）（跳龍 昭和六三年一、二月号 大本山總持寺刊）、前出の『瑩山禪』第十卷（平成三年 山喜房仏書林刊）の大谷哲夫教授執筆の「洞谷開山瑩山和尚之法語」の現代語訳、渉典、校注、語釈、そして「解題」などがある。

しかしながら、冒頭でしるしたように、この法語については、従来の諸説に検討、吟味を加え、更に多角度的な立場に立つてその全体像を明らかにしなければならぬ点があるとおもわれる。本攷執筆の目的はここにある。

一、正法寺と『正法眼藏雜文』

『洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙淨禪師」』を研究するにあたっては、まず、洞谷山永光寺（石川県羽咋市酒井町）ならびに同寺開山瑩山紹瑾禪師のことについて紹介しておくのが順序かとおもわれるが、これについては、すでに私は拙著『瑩山禪師の研究』（昭和四九年 春秋社刊）をはじめ幾多の論文で言及しているので、重複をさけたい。

ここでは、『洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙淨禪師」』を収録する古文書『正法眼藏雜文』一冊を所蔵する曹洞宗正法寺（岩手県水沢市黒石町）ならびに同寺開山無底良韶禪師（二三三—二三六）を紹介しておきたい。『正法眼藏雜文』の記載事項は正法寺、無底良韶と深いかかわりが推

定されるが、これまであまりとりあげられたことがなかったと思われるからである。

正法寺、無底良韶については、『正法寺由来記』（二巻。延宝五年（一六七七）良道撰）『正法清規』（二巻。永正六年（一五〇九）寿雲良椿撰）、『無底良韶禪師行業記之略』（二巻。撰者不明。『続曹洞宗全書』第十卷寺誌所収 昭和五一年 曹洞宗全書刊行會刊）、『正法眼藏雜文』（永正十二年（一五一五）ごろ。寿雲良椿撰）栗山泰音禪師著『嶽山史論』（明治四四年 鴻盟社刊）、大久保道舟博士編『曹洞宗古文書』下巻（昭和三七年 山喜房仏書林刊）収録の「正法寺文書」に明らかである。いま、これらを依用して、おおよその知識をまとめてみよう。

正法寺は、ふつう拈華山正法寺という。くわしくは、大梅拈華山寿宝院円通正法寺と名づける。

正法寺は、貞和四年（二三四八）四月五日、江刺郡黒石の領主黒石越後守正瑞、まさただ長部近江守清秀（重義）が、無底良韶に帰依して草創した曹洞宗の古刹大山である。

無底良韶は、正和二年（二二三三）正月七日、能州酒井保（石川県羽咋市酒井町）に生れた。能州酒井の本主、酒井十郎章長（法名西願）五世の孫であり、洞谷山永光寺開基黙譜祖忍（平氏女。海野三郎滋野信直の妻）の従兄にあたる。また、肉兄の二階堂七郎太郎家秀は出家して、総持寺二世峨山韶碩の門下となり、無蔵浄韶という。いわゆる峨山門下二五哲の第一位が無底良韶、第四位が無蔵浄韶だという。

良韶は、元弘元年（二二三二）一九歳のとき、靈夢を感じた。それは、紀州・熊野権現に詣でて、一生の満願を祈って、夜を徹して證誠殿に

在ったとき、仮眠のなかで夢にひとりの老人があらわれて、袖のなかから一箇の黒石をとり出して言った。「汝は出家せよ。仏法の修行が純熟して、仏法の興隆となる。奇石一箇を汝に授ける」。夢から覚めてみると枕辺にたしかに黒石が置いてあったので、これを懐中にして帰った。

建武元年（二三四）二二歳、出家した。以来、十一年にわたり瑩山禪師の二大高弟である明峰素哲（二七七一三五〇）と峨山韶碩（二七五一三六五）に参禅した。はじめ加賀の大乗寺に明峰素哲を訪ね、明峰から授けられた公案を工夫して、翌歳の三月一日の夜、明峰の認許を得た。さらに、総持寺の峨山韶碩に師事して康永元年（二三四二）二九歳、七月一〇日、宗旨を伝えた。その四年後、貞和二年（三四〇）五月一日、洞谷山永光寺の土地堂で焼香していたとき木版の響きを聞いて忽然として大悟した。

貞和四年（三四八）のはじめ、熊野権現から授かった奇石の黒石と名づけるところをたずねて奥州に入り、白河郷に至り、宿明神宮に立ち寄り、黒石の地が見えるように祈ったところ、その夜、明神があらわれて歌を示した。

白河ノ水ノ底ナル黒石ヲ

手ヲモヌラサデイカガ取ルベキ

良韶は、神示にしたがつて南部を過ぎようとしたところ、早池峯権現で老人があらわれて言った。「江刺黒石こそ、師の住むところである」。更に歩を進めること二、三日を過ぎて、黒石邑に到着した。

良韶は夢を見た。貞和四年四月五日、はじめてこの山に入り草庵を

結んで終日坐禅していたときのことである。良韶は一心に護法神に祈念をこらしていた。この地こそ仏法の霊場にふさわしい。その瑞祥を確認した。それは寅の刻（午前三時―五時）に仏法僧鳥の泣く声がしたからである。また四月十三日の夜牝牡の山鹿が庵のうしろにやってきて、この山は仏法の道場であるから、汝はよくわが法を守るように。また、翌夜に瑞夢を見た。前夜の鹿はこの山の守林神である。師の仏法はいま自分たちにとっては希有のことであるとよろこんでくれたという夢である。

このようなわけで、黒石の奇石は正法寺の守護石ともなっているのである。また、熊野権現、白山権現も、正法寺の守護神として位置づけられている。

こうして貞和四年に、正法寺が草創されるのであるが、翌貞和五年の正月一日に、良韶は「夢記」をしるしている。これによれば、夢のなかで師の峨山韶碩から瑩山禪師の法衣を相伝されたのである。また大梅拈華山の山号、円通正法寺の寺号を指定するにあつて、大梅法常禪師と道元禪師との夢を介しての契合、梅花が第一であることがしるしてある。

良韶、奥州伊潭群^{（澤郡）}黒石郷ニテ靈夢ヲ感ス、貞和五年^{（巳）}正月一日寅尅中ハ、我古郷ニ歸テ、吾師峨山大和尚ニ自瑩山和尚ノ法衣相傳セムトス、吾亡母師ノ御身ニツキ申ツキテト請ス、母可申由リヤウシヤウス時ニ、我師三尺計ノ劒ヲヒムサケテ我前ヲスキ給、我問、傳聞我師大唐明本中峯ノ法文ヲ説ト、事實ナリヤ、我等カ小見ニタニモ事ノホカニタカ

イ存スル法文也、師イカムテ某甲ニムカイテイハク、都テ與ヲナラス、シハラクアリテ又靈夢ヲカムス、イツクトモ處ハシラサ山アリ、我寺山ニアタカニタリミレハ、梅花彼山ニサカリナリ、一本モサウ木ナシ、木ノカスイラトシラス、深雪ノ萬山ヲウツムカコトシ、花ノ色サカムニイロヨカナル事、畫カクトモフテヲヨヒカタシ、某甲梅花山ヲミテヲモウ、ツ子ノ梅ノ花トイ、ツヘキニアラス、サキコメタルスカタ櫻ニニタケリトカムシ、又思、花ノ中ニハ梅第一ナリケリト、フカク心ニカムシヲモウトキ嵐シ木甲ヘス、梅花ヲフキテクトルイ香某甲カ鼻孔ニイル、スヘテカムシテ大ニ歡喜ス、第三度マテ嵐吹キタル梅香、某甲カ鼻孔ニ入ル、大ニカムシナカラ夢サム、マコトニ永平先祖ノ大唐大梅山護聖寺ノ旦過ニテ感得ノ夢ノ記ト、相應スト不疑ナリ、始ハ我コノ山號ヲ拈花ト云、コレヨリ大梅トナヘテ、大梅拈花山ト號ス、寺號本ハ正法寺ト云、圓通トナヘテ圓通正法寺ト號ス、子孫連續シ永劫不退ナラム事、マコトニ分明ニ識得ス、謹記永平開山ノ御ツケナル物ナリ、子孫一人ニアラスハミスヘカラス云々、

貞和五年^{己丑}正月一日夜寅刻中ハナリ、明テコレヲ記ス、

良韶（花押）

良韶はここでとくに触れていないので、さらに私が補って添えれば、正法は正伝の仏法ないし道元禪師の『正法眼藏』を意識したものであろう。正法寺には文明年間の火災で焼失したが、良韶手沢の『正法眼藏』写本があつたという。現存するものは、永正九年、寿雲良椿が徒弟に書写させた七五卷本（九卷欠）である（永久岳永著『正法眼藏の異本と伝播史

の研究』昭和四八年 中山書房刊）。拈華は、釈尊の靈山會上の拈華、摩訶迦葉尊者の微笑に由来する仏法相伝の根源を示すのであろう。円通は観音信仰にもとづくところがあるのであろう。

良韶の禪風を聞いてその門に参ずる者一千人を数えたといひ、崇光天皇は、觀応元年（二三五〇）五月六日、綸旨を下して奥羽二州僧録扶桑曹洞第三本寺（永光寺、總持寺に次ぐ寺との意）紫衣着用兩国出世道場とした。

また、正平一〇年（二三五五）師の峨山韶碩の指示により、能登に歸り、永光寺の第八世住持をつとめた。翌年八月、正法寺に歸山した。康安元年（二三六二）六月十四日、数えて四九歳で示寂した。

良韶の滅後、やはり能登の出身と伝える月泉良印（二三九一—一四〇〇）が後席を薫して、正法寺の第二世となり、羽後（秋田県）に補陀寺を開創し、峨山韶碩より總持寺住持の懇請を固持し、法嗣四三人の多数を打出し、正法寺は、文字どおり、東北地方における瑩山禪師ひるがえつては道元禪師の祖風を護持する一大拠点となった。

正法寺には、三国伝来の仏舍利が奉祀されている（『正法眼藏雜文』と伝えられており、また愛知県名古屋市日進町の曹洞宗靈鷲院には、「道元、瑩山、無底良韶禪師御靈骨」が安置されている。これは、正法寺二三世定山良光によって分骨されたものが、靈鷲院開基微笑尼によって同寺に安置された（『曹洞宗——郷土の名僧と寺宝——』昭和五九年 監修竹田鐵他）。私が、昭和四九年六月一三日、正法寺に拝登したときには、宝物殿に、道元禪師、瑩山禪師の靈骨というのが安置してあつた。

正法寺開山無底良韶は、能登の洞谷山永光寺開基と従兄弟の血縁関

係にあり、瑩山禪師の孫弟子であり、永光寺の住職をつとめた。このように、無底良韶は、永光寺、瑩山禪師とは法縁、肉縁ともにきわめて濃いかかわりをもっているのであつて、正法寺の『正法眼藏雜文』が無底良韶を抜きにして考えることはむずかしいといわなければならぬ。さて、『洞谷開山瑩山和尚之法語』示「妙淨禪師」をおさめる『正法眼藏雜文』と名づける書冊であるが、これは永正二十二年（一五一五）の前後、正法寺第八世壽雲良椿らが記した一五編の法語、置文、連判状そのほかである。

私は、昭和四三年、曹洞宗宗学研究所員の畏友渡辺勝人氏より複写本『正法眼藏雜文』一冊の恵与をうけた。これによると、全紙四二枚、収録されている内容の項目を順次挙げて紹介すると、次のとおりである。

（表題） 正法眼藏雜文

（ここにしるす紙、左右は、私の所蔵する複写本に依っている）

○辨道話 永平開山元和尚記（第一紙左—第一四紙右）

前掲の衛藤博士著『正法眼藏序説』、大久保道舟博士編『道元禪師全集』上巻（昭和四四年 筑摩書房刊）に「辨道話（別本）として収録されている。衛藤博士は、これを『辨道話』の草稿本とよんでいる。

○洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙淨禪師」（第一四紙左—第二三紙右）

○題於越以吉祥山永平寺之境致十一首・同開山之御作（第二三紙左—第二三紙右）

○洞谷尽未來・可為本寺之置文・同開山紹瑾・御自筆御判（第二三紙左）

○勅諭佛慈禪師贈号之状（第二四紙右）

○峩山門下連判之状（第二四紙左）

○峩山大和尚定正法開山御道号云（第二五紙右）

○伏以於本朝曹洞之仏法……（第二五紙右）

○永平伝云・初祖道元禪師……（第二五紙左—第二六紙右）

○諸嶽山總持寺建立之時 峩山大和尚之夢記 峩山和尚四十三之御時也（第二六紙—第二七紙左）

○元享四年^{（甲子）} 七月七日讓与總持住持職於碩……（第二八紙右）

○洞家代々伝衣之系図（第二八紙右）

○当門為洞家之的孫而・相承代々伝衣更（第二八紙左—第二九紙右）

○右当山鎮守勸請熊野白山……（第二九紙右）

○曹洞家之宗派（第二九紙左—第三〇紙右）

○当山尽未末際為出世之地……（第三〇紙左—第三二紙右）

○永平開山和尚皈朝之年代有兩説也……（第三二紙右）

○当寺開山和尚御生国能召酒井保……（第三二紙左）

○当山開闢已来……（第三二紙右）

○開山和尚開闢已来御在世十四ケ年也……（第三二紙右）

○右当山開闢之時代（第三二紙左—第三六紙右）

○当寺二代和尚之葬記（第三六紙左—第四一紙左）

右のおおよそ二二項目の内容を概観すると、最初期の正法寺を中心とする日本の曹洞宗、なканづく永平寺、総持寺ないし叡山派、永光寺瑩山禪師、正法寺に関する記録によって占められていることがわかる。

このうち、『辨道話』、『洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙淨禪師」』、『洞谷尽未来際為出世之地』、『洞谷尽未来・可為本寺之置文・同開山紹瑾・御自筆御判』などは、永光寺、瑩山禪師にかかわるものである。これは、くりかえすが無底良韶と永光寺との深いかかわりがその背景にあ

るゆえんであろう。

『正法眼藏雜文』の筆写者は、その筆跡の同一性から判断して、始めの第一紙から終りの第四二紙まで同一人であるように考えられる。ただし、『洞家代々伝衣之系図』の項には、別人が加筆したのではないかと推察出来る箇所がある。もとより正法寺の関係者が筆写したことはまちがいないであろうが、それがなにびとであるかを特定することはまだ断定できない段階である。

二、『洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙淨禪師」』の成立、伝承

『洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙淨禪師」』の成立、伝承については、この法語の奥書きによるほか、直接の手がかりはない。奥書きは左のとおりである。

彼法語見本校割文明年中回録以来無^レ之愚奉憲先哲之古風餘尋覓之為當庵之常住者也

于時永正十二年^乙亥（入寂以来百九十四年）八月十五日奉書写以報謝洞谷開山瑩山大和尚大禪師之二百年忌辰者也 住山比丘壽雲良椿謹拝書

この奥書きをいま分析してみると、

1、『洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙淨禪師」』の存在は、正法寺の校割帳に出ていた。

2、しかし、正法寺の寺宝類は、文明年間（二四六九—一四八四）の火災で焼失した。したがって、この法語も灰燼に帰した。

3、先哲の古風を恋慕する正法寺八世寿雲良椿は、この法語を関係方面に照会して、入手して、これを浄写して、いまは山内の続灯庵の常住としたのである。時あたかも、永正二年（二五二五）八月一日である。これを以って来る大永年間の瑩山禅師二〇〇回忌（瑩山禅師の二〇〇回忌は大永四年となる）の報謝とするという。

以上のとおりである。寿雲良椿は、原本をどこに求めて入手したのか。なにも記すところがない。『正法眼蔵雑文』に収めてある『辨道話永平開山和尚之記』は、元徳（正慶改元 一三四二）四年一月七日、永光寺の知賓寮で旨国という僧が書写したものであって、それを寿雲良椿が『洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙浄禅師」』を書写する一三日まえに浄写した。このような経緯から、衛藤博士は「同じ永光寺の所蔵と推定できるのである」（前掲書三八頁）と述べている。このことは、先に永光寺と正法寺との深い関係を述べたが、この理由によって、私も同意するものである。また、表題が『洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙浄禅師」』（傍点は東が付す）とあって、総持開山とか正法寺開山とないところにも、永光寺の原蔵であることをイメージ的にも強調している。

しかし、私の知るかぎり、『洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙浄禅師」』の原本ないし写本が、ただいまのところ永光寺はもとより他の寺院において所在が明らかになったという報告に接していない。言いかえると、この法語の写本は、この正法寺蔵『正法眼蔵雑文』のなかにのみ見出すのである。他方面から写本が登場しないものかどうか。新しく

発見されれば成立、伝承の事情は、よりいっそう明らかにされることになるであろう。

三、瑩山禅師、妙浄と『洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙浄禅師」』

『洞谷開山瑩山和尚之法語 示「妙浄禅師」』は、題目の示すところによれば、洞谷山永光寺の開山である瑩山禅師が、妙浄なる禅師に示した法語である。

この法語のなかに、「曩祖永平和尚」、「曾祖永平開山和尚」、「予三代ノ法燈ヲ挑ケテ、来世ノ蒙昧ヲ照ス」などの語がある。瑩山禅師は、道元禅師（永平寺開山）、懷奘（永平寺第二代）義介（永平寺第三代、大乗寺開山）の三代の法燈を継承する祖師である。瑩山禅師にとって永平開山和尚道元禅師は、法脈の上からは曾祖（祖父の父親）にあたり、仏祖正伝の日本の源頭としては「曩祖」（先祖）にあたるのである。また、この法語のなかに、「曩祖永平和尚云、人トシテ意根ヲ截斷セシカ如キシハ、千人ハ千人ナカラ、万人ハ万人ナカラ、皆得道スヘシ」と云へり、誰人カ信受奉行セサルヘキ」とあるが、傍点の部分は、瑩山禅師の代表的提唱録『伝光録』第五十二祖永平禅和尚章に同文が出ている。また、この法語は寒山詩の一節「泣露千般草 吟風一様松」を引いて結んでいるが、この詩と同文は、瑩山禅師の撰述とされる『信心銘拈提』に出ている。これらの点からみても、現時点では、この法語が瑩山禅師の垂示をしるしたものであることはまちがいないとしてよいであろう。

さて、妙浄なる禪師については、瑩山禪師の洞谷山永光寺時代（正和元年（一三二二）—正中二年（一三三五））の記録である『洞谷記』に、「元亨元年（辛酉）本願主海野三郎信濃滋野信直 十一月二日 受戒法名妙浄」（大乗寺本）とあって、元亨元年（一三二二）永光寺の開基、海野三郎滋野信直は、同寺において同寺開山瑩山禪師より受戒し、妙浄の法名を授けられたという。この法語は、まず「先日、我、公ヲ呼フ、公即イラフ……」うんぬんということではじまるが、ここの公とはすなわち酒井保の地頭で大檀那である海野三郎滋野信直を指すことになる。

この時点で、受戒（瑩山禪師の側からすれば授戒）の意味するところは、在家信者として受戒したのか、出家僧侶として受戒したのか、あるいは在俗のままで僧形をして修行する者いわゆる入道として受戒したのか、やがて出家僧侶となる予修の受戒か、妙浄禪師というからには、出家僧を意味するとおもわれるが、この間の消息は必ずしも明確には出来ない。もっとも、このことは直接にはむすびつかないかも知れないが、この法語のなかで、瑩山禪師は、真実の道を学び、禪に生きる人は、外面的な出家、在家、男女の別なく、長老と称すべきである、とのべている。すなわち

禪ト云ハ是向上ノ宗要、佛祖不傳ノ一着ナリ、僧ト云ハ、是物外ノ消息、無爲無作ノ渾身ナリ、故ニ向上は無爲、無爲は向上、無二無別ナリ、若如レ是ナラハ、不許ス汝ニ、禪僧ナル事、許ス汝此ノ禪宗ナルコト、若又如レ以前、各々所會ナラハ、恰モ教法ノ、卑拙ナルニモ劣レリ、實ニ是不レ恥ラヤ、縦ヘ僧ト云トモ、又比丘ナリトモ、徒ナル男子ナリトモ、又女子

ナリトモ、如レ是道ヲ會セハ、是長老ナリト云ヘシ、所以者何、長老トハ人ノ老大ナルヲ不レ言、道ノ長シ法ノ老ヲタケタル、長老ト云、不レ見ヤ、大唐ニ憑相公ト云ヘル人アリ、祖道ニ長セリ、大官人ナリ、後ニ作レ頌云、公事之餘喜坐禪少ニ曾將ニ脇到ルコト床眠、雖モ然現ニ出宰官相ヲ、長老之名四海傳、是俗人タリト雖ヘトモ、祖道ニヲイチャウセル故ニ、大唐世舉コソツテ、皆此人ヲ長老トイヘリ、尤モ可レ尊、又五百人千人、乃至百人五十人ノ、主席ヲツカサルトモ、心源ニ暗ンヲハ、何是ヲ稱レ長老、若是ヲ長老ト云ハ、山家村里ノ漢、富貴有徳シテ、尚嫌レ少年ヲモ、長老ト云ヘシ、

と。このような考えのもち主である瑩山禪師においては、禪師という語にもそのより実質の意味が強くひそんでいるとうけとめてもさほどまちがってはいないように思われる。なお、また、瑩山禪師は、元亨元年より四年後の正中二年（一三二五）には遷化してしまう。元亨元年は、いわば瑩山禪師の晩年期といつてよい。してみれば、瑩山禪師にとつても、海野三郎滋野信直にとつても、授戒、受戒のもつ意味はきわめて大きいものがあつたと考えられる。

こうして、この法語は、海野三郎滋野信直が瑩山禪師から受戒して妙浄という法名を授けられた元亨元年十一月二日、そしてこの日からあまり時間的に経過しない時点で示されたものということになる。というの、

予三代ノ法燈ヲ挑ケテ、來世ノ蒙昧ヲ照ス、異ナル義様ナク、メツラ

シキ智恵アラス、十餘年但此ノ三昧王三昧ニ端坐シテ、不思議解脱ノ法門ヲ開演ス、他一切衆生ノ安穩ヲ扇開スルナリ、

とある。ここに「十余年」とあるが、元亨元年から一〇余年を逆算すると、およそ正和元年（一一三二）前後となる。かりに正和元年とすれば、この年は海野三郎滋野信直夫妻が瑩山禪師に帰依して、永光寺の土地を寄進したところに相当する。したがって、「本書の成立はこの受戒の日から瑩山禪師の入寂正中二年（一一三五）八月一日に至る三年九ヶ月の間のこととなる」（『曹洞宗全書』解題・索引。解題）の三年九ヶ月というのはいささか大雑把な措定といわなければならない。

ちなみに、椎名氏は、この法語は、直接には海野三郎滋野信直を対象としつつ、間接的には永光寺の修行僧多数を対象とした説示ではなかったという趣旨の見解を述べている。その理由は、「汝等」という複数の人称代名詞が見られるからである。すなわち、「本法語全篇中、三カ所にみいだされる『汝等』なる語の存在意義についてである。瑣末の問題との譏りをうけるかもしれないが、本法語がひとり妙浄禪師海野三郎公に対してのみ説示せられた法語であるならば、なにゆえ披説示者に対して、かかる複数の人称代名詞を必要とするのであろうか。『汝等』は、随所に存する『汝』や、『爾』の語の間に混在している。かかる用例の原文をみよう。

(1) 其レ見性成仏トハ、汝等、本来其人ナリ、（第十六丁表）

(2) 誠哉、三界ノ中ニ身相ヲ不レ現、地獄天宮、イツクンソ便ヲ得ン、如レ是識得セハ、許レ汝味カラサル事ヲ、所以者何レハ、汝等、是其人ナ

リト雖モ、一念源ニ迷イヌレハ、紛々忿々トシテ、有時ハ惡心不善ノ境心置、来世地獄ノ因ヲ植ヘ、少モ畏怖スル心ナシ、（第十六丁裏）
(3) 汝等、只今生ニ不レ了者、又何レノ時ニカ待レ真、一大事因縁ヲ明メン、此事モシ明メント思ワハ、自受用三昧シクヘカラス、（第十七丁表）

右の文中の用法をみるに、『汝等』はすべて人称代名詞にほかならぬであらう。該当箇所は、原本をみても写誤をおかすがごとき箇所ではない。しからば、これらの『汝等』はなにを意味するのか。

この疑問を解く鍵は、本法語の内題中に秘められているかに思われる。すなわち、本法語における

洞山開山瑩山和尚之法語 示「妙浄禪師」

なる内題は、元来、瑩山禪師の門弟などの付会した名称であり、古くは「示「妙浄禪師」」のみであつたと考えられる。しかるにいま、この「示」の一字に注目したい。すなわち、本法語が「示……」であり、「与……」ではないという事実をである。

法語という性質上、『与』と『示』の相違は看過できぬ。『与』は『示』を包含するが、その逆はなりたたぬからである。かかる事實は、本法語は、禪師が海野公に与えた卷子一篇を意味するのではなく、各種の示衆説法中、特に大檀越の得度にちなんで示されたひとつの示衆・垂示的な語録ではないか、という推定をおこさしめるものである」とする（椎名氏前掲論文）。

「汝等」という複数人称代名詞が単数人員をも含めた慣用語としての性格を有せず、厳密に複数人員を指した用語であると規定すれば、指

しかし、先にも触れたとおり、この法語は「先日、我、公ヲ呼フ、公、即、イラフ」ということばではじまっている。この「公」が海野三郎滋野信直を指すのであれば、この法語は妙浄個人に対して説かれたものであることはまちがいないのである。法語のなかには、「汝等」の語もあるが、

破蒲団ノ上ニ、端坐スル時、身心共ニ脱落ス、何物カ爾ヲ障ヘヤ

というように、「汝」、「爾」の単数人称代名詞も当然もちいられているわけで、この点も軽視してはならないと考える。

さて、また、妙淨禪師こと海野三郎滋野信直に關してであるが、私
は、かつて「太祖瑩山禪師」（三二六）（『跳龍』昭和六二年二月号 大本山總持

て、佐久北御牧村兩羽神社に石祠を建立する。

しかし、その年の五月、幸康らは、宗良親王に従って、武蔵国小手指原で、足利軍に大敗し、戦死した。

とまれ、海野氏は滋野氏を祖とする。また、かの真田氏は、海野氏の一族である。

前後するが、長野県小県郡東部町には、かつて滋野村、滋野鎮守の地名があり、滋野氏を祀る神社もある。

また、東部町には、いま本海野という地名があり、この本海野宿は、八世紀なごころ海野郷とよばれていた。昭和六二年四月、文部省から重要伝統的建造物群保存地区として選定され、宿場としての歴史的環境を今に保存している。

遠州・大洞院を開いた如仲天閭禪師（二二六三—一四三七）は、信州上田の人で、俗姓は海野氏という。

如仲天閭禪師の高弟のうち、備中・洞松寺開山、喜山性讚禪師（二二七七—一四四二）、遠州・海蔵寺開山、物外性応禪師（二四五八寂）もまた信州の出身である。

長野県北佐久郡立科町に、およそ一三〇〇年の法統を伝える天台宗の古刹、大坊がある。

信濃天台五山の一、日本三津金寺の一、恵日山修学院津金寺という。

中興の開祖とされる穩海大僧正は、建徳元年（一三七〇）、恵心流の法を継いで、この寺に晋住した。比叡山正覚院大僧正豪盛の弟子であり、久我大納言の猶子であった。

久我大納言の猶子といえ、わが道元禪師と同族か。

ときに、三六院二四坊、門末四八寺、あわせて一〇八寺の本山となり、津金寺は、隆盛をきわめたという。

この津金寺に、滋野氏の石造宝塔三基があつて、県の指定文化財となつてゐる。

石造宝塔の三基は、鎌倉期、承久二年（一二三〇）二基、嘉禄三年（一二三二）一基がそれぞれ建てられた。

ときの滋野氏が、逆修供養と、故人の菩提を弔い、納経したのである。

江戸の末期、文化年間（一八〇四—一八一七）のはじめ、住職の長海和尚が、墓域を修理し、遺蹟を顕彰し、子孫（松代藩真田氏の老臣・望月重教）を招き、追善供養の法要をいとなんだ。

が、津金寺に、滋野氏とくに海野三郎滋野信直に関する記録、伝承は、残っていないようである。

滋野氏の系図に、元直（宮内少輔・法名元山）の子が信直（美濃守、法名榮女）と出ている。

この信直なる人物が、いまの海野三郎滋野信直と同一人かどうか、今の段階では確かめられない。

昭和五五年、永光寺の方丈から、山主三輪悦禪老師によつて、酒匂八郎頼親、海野三郎滋野信直の肖像画らしき二点が発見された（昭和五年二月七日付『北国新聞』）

四、『洞谷開山瑩山和尚之法語 示妙淨禪師』の内容構成

この法語の内容構成を論ずるにさきだつて、この法語の題名と主旨について触れておきたい。

まず『洞谷開山瑩山和尚之法語 示妙淨禪師』という題名であるが、この原本ではどのようなものであろうか。というのは、洞谷開山はともかくとして瑩山和尚などと瑩山禪師自身が命名するはずはないであろう。後代の別人の命題とするのが理解しやすい。示妙淨禪師は、瑩山禪師が付けた題名であつたのかも知れない。あるいはもともとの原本は無題であつたとも想像される。はつきりしたことは不明であるというほかない。

この法語の主旨については、衛藤博士が、「高祖道元禪師は当時の教界を対機として宗要を提唱せられたのが辨道話であり、太祖瑩山禪師は帰依の大檀那接化の為に永平の宗要を開示したものがこの法語であり、とすればこの両書が正伝の仏法の顯揚としてその歸趣を一にするのはむしろ当然のことである」(前掲書四一頁)とのべている。基本的な理解としては私もとくに異義はないが、しかし道元禪師の『辨道話』と瑩山禪師のこの法語とが函蓋相合する正伝の仏法の顯揚であるとは言つても、道元禪師から瑩山禪師への同一性、共通性を強調するのあまり、道元禪師とはことなる瑩山禪師の独自性を見失うものであつてはならないであろう。実際、この法語がかりに『辨道話』の影響を受けているにせよ、この法語の個性はおのずからあらわれているのである。道元禪師の宗風を統一に継承する瑩山禪師の個性をこの法語のなかに

看取しなければならない。

さて、この法語の内容構成についてであるが、この法語はおよそ六〇〇〇字から成り、その表記は漢文片仮名混淆文体である。句読点はない。また、いわゆる目次や見出しなどの類いも一切ない。しかし、その内容にはおのずから一定の順序と主張の力点が見られるのは当然である。これについては、三段に分ける説(衛藤即應説)、五段に分ける説(曹洞宗全書^{解題}、椎名宏雄説)、一〇段に分ける説(大谷哲夫説)が提出されている。いま、これらを要約すると次のようになるであろう。

三段説(『正法眼蔵序説』三八頁—四〇頁)

第一段—自己何者ぞから説きおこし、七仏の妙行としての坐禪の要義を明らかにして、參禪辨道を策励する。

第二段—釈尊から達磨に至る禪風の真意を解明し、出離生死の要道として無常觀による求道の急務を説き、自己何者ぞと照応して説く。

第三段—諸種の禪病(依文解義の禪、觀心觀定の禪、待悟の禪、自然見の禪など)を破斥し、正師をえて印可を受けるべきことを強調している。

五段説(『曹洞宗全書』^{解題} 四三—四四頁)

第一段—自己の本性について説く。

第二段—真知について説き、なかならず清心の行と不措相應を示す。

第三段—無為の三昧に親しむべきことを述べる。

第四段—待悟為則を拒ける。

第五段—仏祖不伝の一著、向上の宗旨としての坐禪を説く。

○(『瑩山禪師に関する三種の「仮名法語」考」八九六頁—八九八頁)

第一段—人々本具の面目を根源的に覚知することこそ参禪の要諦であることを示す。(顯正門)

第二段—右の面目を覚知する実践行として知の二道(坐禪一行三昧と生活全般の用心)が説かれる。(顯正門)

第三段—得道への策励と啓発をうながす。まず無常觀により発心し、ついで善因善果を積むことを勧懲する。(顯正門)

第四段—諸種の禪病(外教に留むる輩、依文解義の禪、觀心觀定の禪、淨土欣求の念仏者、公案禪者、枯木死灰の禪、心識禪者など)を指摘し、これらを排斥する(破邪門)。

第五段—正しい修禪学道のために、真の善知識に師事して、印可証明を受けることを強調している。(顯正門)

十段(章)説(『瑩山禪』第十卷法語語錄講解三三頁—三四頁)

第一章—仏法における自己の本性に関する説示。

第二章、第三章—清心の行、不措相應としての知のあり方。

第四章、第五章—釈迦、達磨、玄覺等の事跡による無為の三昧に関すること。

第六章、第七章、第八章—慧能、玄覺、道元禪師らの言葉による待悟禪的な仏法への非難と正伝の仏法のあり方について。

第九章、第十章—正伝の仏法、向上の宗旨としての只管打坐の坐禪についての説示とその挙揚。

おおよそ以上のとおりである。その一一については批評すべき点もあるが、いまは省略するとして、要するところ、椎名説は衛藤説を参考にしており、大谷説は曹洞宗全書の解題が土台になっている印象を

うける。どちらかといえば前者の解釈法がこの法語をよりの確に体系的にうけとめている。全書の解題の五段説によつて、この法語を体系的にうけとめることはむずかしい。大谷説は、全書の解題の五段説を下敷きにして十章(段)説を展開したが、実質的には五段説と同じで十章に分段した意味は乏しい。また、第十章は只管打坐の坐禪を説示しているとしているが、いったいこの法語には只管打坐の語はない。「坐禪一行三昧」、「三昧王三昧」、「自受用三昧」、「身心共ニ脱落」などの語はあるが、「只管打坐」の語はない。独断的な思い込みを前提にして解釈してはならない。

さて、私は、この法語の内容は、構成的には、次のように大きくは三段に分けることにする。

第一段—主として自己の自覚と自覚への二つ(坐禪一行三昧と行住坐臥の工夫)の実践方法が説かれている。(序論)

(先日、我、公ヲ呼フ、公、即イラフ……不思議解脱ノ法門ヲ開演ス、他一切衆生ノ安樞ヲ扇開スルナリ)

第二段—主として正伝の仏法の歴史的展開が説かれている。(本論)

(靈山会上釈迦尊百万ノ衆ノ前ニシテ、一枝ノ花ヲ拈ス……真ニ知ル、不思議不思議ノ時、本来ノ面目アラワレ来ル事ヲ)

第三段—主として他宗、他教、諸禪病の批判と正伝の仏法の勧誘ならびに正師による印可証明の重要性が説かれている。(結論)

(曾祖永平開山和尚ノ云ク、不思議而現シ、不回互而成ス……泣露千般草 吟風一様松)

右のとおりである。

この法語の構成については、この法語自体が目次も見出しもない以上、読者の判断にまかされている部分もないわけではない。これまでの三段説から一〇段説についていえば、細分化することは際限もないが、大きくいえば三段から五段に分類するのが適當であろう。大きくは三段構成としてまとめる。ないし、三段を土台にして五段くらいに細分すれば、理解しやすいと思うのである。

五、『洞谷開山瑩山和尚之法語 示三妙淨禪師』の引用典拠

この法語には、多くの文献が引用されている。極言すれば、全文すべて引用分であると言ってよいほどである。すなわち、後代の仏教、禪の文献、撰述は必ず前来の先人たちの言行やばう大な經典論書をよりどころとする。いま、この法語のなかに見られる引用文の典拠を調査することは、瑩山禪師がどのような典籍を所持し渉獵したか、どのような書物、人物にどのような興味、関心を抱いていたか、どのような思想傾向が見られるか、この法語の特色はどこにあるかなどを知る手がかりをえることになる。とはいっても、引用典拠を正確に指摘するには、その条件、資格として、調査する側に長いあいだにわたってばう大な文献に目を通してきた博学の士でなければならぬ。大海の一滴にも注意深く追求する忍耐と努力が要請される。とうてい、私はその任ではないが、現段階において判明する限り、とりあえず道元禪師の撰述関係を中心に、以下に列挙掲示して、いささかの私見を添え、この法語を理解し参究するための資助としたい。なお、現在も検

索が進行中であることを申し添えておく。(ゴシック体の文章は、この法語の本文である。以下、句読点、傍点は東が付す)

◎此法ニ安住スレハ、知ニモ属セス、不知ニモ属セスシテ、已ニ自ラ道者ト成ナリ

師問南泉、如何是道、泉云、平常心是、師云、還可趣向不、泉云、擬即乖、師云、不擬、争知是、泉云、道不属知不知、知是妄覺、不知は無記、若真達不擬之道、猶如太虚、廓然蕩豁、豈可強是非也、師於言下頓悟、玄旨、心如朗月(『趙州禪師語錄』卷上一頁 春秋社刊)

南泉因趙州問如何是道、泉云平常心是道、州云還可向否、泉云、擬趣向即乖、州云、不擬争知是道、泉云、道不属知不属不知、知是妄覺、不知是无記、若真達不擬之道、猶如太虚、廓然洞豁、豈可強是非也、州於言下頓悟(以下略)(『昭和重修無門関』五六頁 興國寺刊)

趙州真際大師問南泉、如何是道。泉曰、平常心是道。師曰、還可趣向否。泉曰、擬向即乖。師曰、不擬又争知是道。泉曰、道不属知不知。知是妄覺、不知是无記。若真達不疑之道、猶如太虚廓然蕩豁。豈可強是非耶。師言下頓悟玄旨。(道元禪師撰 真字『正法眼蔵』上 河村孝道博士著 真字『正法眼蔵』成立・編輯、伝写の様相『八八頁 教行社刊』)

へ参考

(ここに参考とは、他の盤山禪師の撰述類について渉典したものを参考までに揭示することを意味する。以下おなじ)

師(盤山禪師を指す)乃曰。妙靈廓通。普光赫奕。円照不遺。有誰疑著。見闕俱不誤。受用已無礙。人人尽有光明在。全体不藏露堂堂。不待石烏龜解語。不妨木上座聽証。從來不属知不知。誰道平常心是道。(盤山禪師『洞谷記』初版『常濟大師全集』四二八頁 大本山總持寺刊)

自己本分ノ心佛ヲ不見衆生ヲ不見豈迷ト厭悟ト求ヘケンヤ其人ヲシテ直ニ見セシメントシテ祖師西来ヨリ此方有智無智ヲ不云旧学新学ヲ不云一片ニ端坐セシメテ自己ニ安住セシム即是大安樂法門ナリ(侍者編『伝光録』第二十一祖婆須盤頭尊者章 拙著『校注 乾坤院本伝光録』五〇頁 隣人社刊)

◎大安樂ノ法門トス、是ヲ非思量ノ修行トス

兀兀坐定、思量箇不思量底、不思量底如何思量、非思量、此乃坐禪之要術也、所謂、坐禪、非習禪也、唯是、安樂之法門也(道元禪師撰『普勸坐禪儀』『道元禪師全集』第五卷六頁 春秋社刊)

◎洪波ニ不_レ入者、ロウテウノハウニ暗_レラカランカ如シ

金剛座ニ坐スル坐ニアラナリハ不_レ聞、又実ヲ論セハ、南嶽ト太寂ト相イ見テ得法咨_シ参セシ因縁ヲ可_レ明、一揆両頭動ノ旨有リ、坐ノ外ニ開悟セシモ、皆曾テ坐ノカラ有ハナリ、田ヲ耕サテ稲ヲ得ル人未_レ聴、此

法ノ深意ヲ知ラント思ハハ、修シテ可_レ知、洪波ニ不_レ入、弄_レ潮ノ方ニクラシ(正法寺藏 道元禪師撰『辨道話』『正法眼藏序説』三三三頁 岩波書店刊 衛藤即応博士の指摘による)

◎五家七宗ノ宗旨、偏ニ坐禪三昧ヲ以テ自受用ノ修行トセリ

五家異レトモ、唯タ一仏印也……仏法ヲ住持セシ諸祖、ナラヒニ諸仏、共ニ自受用三昧ニ端坐スルヲ以テ、開悟ノ直道トセリ(正法寺藏 道元禪師撰『辨道話』前掲書三二七頁)

◎曩祖永平和尚云、人トシテ意根ヲ截断セシカ如キンハ、千人ハ千人ナカラ、万人ハ万人ナカラ、皆得道スヘシト云ヘリ

坐断意根、今令不向知解之路也、是乃誘引初心之方便也(道元禪師『永平初祖学道用心集』『道元禪師全集』第五卷三六頁 春秋社刊)

而今、各々も、一向に思切て修して見よ。十人は十人ながら、可_レ得道也。先師天童のすすめ、如是(道元禪師。懷獎編『正法眼藏隨聞記』卷二『道元禪師全集』第七卷七五頁 春秋社刊)

へ参考

永平開山云人道ヲ求ルコト世ニ高キイロニアハント思コワキカタキヲ打ント思堅城ヲ破ント思カ如クナルヘシ志即深キテ此色ツイニ値サル

コトナシ彼城破ラサルコトナシ此心ヲ以道ヒルカヘサン時千人ハ千人ナカラ万人ハ万人ナカラ皆悉得道スヘシト(侍者編『伝光録』第五二祖永平并和尚章 拙著『校注 乾坤院本伝光録』一一五頁 隣人社刊)

◎十余年但此ノ三昧王三昧ニ端坐シテ、不思議解脱ノ法門ヲ開演ス

あきらかにしりぬ、結跏趺坐、これ三昧王三昧なり、これ証入なり。

一切の三昧は、この王三昧の眷属なり。結跏趺坐は、直身なり、直心なり、直身心なり、直仏祖なり、直修証なり、直頂類なり、直命脈なり。いま人間の皮肉骨髓を結跏して、三昧王三昧を結跏するなり。世尊、つねに結跏坐を保任します、諸弟子にも結跏趺坐を正伝します、人天にも結跏趺坐をしへますなり。七仏正伝の心印、すなはちこれなり。(道元禪師撰『正法眼蔵三昧王三昧』『道元禪師全集』第二卷 一八〇頁 春秋社刊)

未点地在は、地といふは、是れ什麼物なるぞ。いまの大地といふは、一類の所見に準じて、しばらく地といふ。さらに諸類、あるひは不思議解脱法門とみるあり、諸仏所行道とみる一類あり。しかあれば、脚跟の点すべき地は、なにものをか地とせる。地は実有なるか、実無なるか。又おほよそ地といふものは、大道のなかに寸許もなかるべきか。問来問去すべし。道佗道已すべし。(道元禪師撰『正法眼蔵古鏡』『道元禪師全集』

第一卷二三六頁—二三七頁 春秋社刊)

〈参考〉

有ニ寂靜有漏妙術、是謂ニ坐禪、即是諸仏自受用三昧、又謂ニ三昧王三昧、若一時安ニ住、此三昧、則直開ニ明心地(中略)只安ニ住諸仏自受用三昧、遊ニ戲菩薩四安樂行、是豈不ニ仏祖深妙之行乎、或雖レ説レ証無証而証、是三昧王三昧。(瑩山禪師『坐禪用心記』初版『瑩山禪師全集』二四四頁—二四七頁 大本山總持寺蔵版)

◎靈山会上釈迦尊百万ノ衆ノ前ニシテ、一枝ノ花ヲ拈ス、迦葉破顔微笑シテ正法ヲ伝

世尊靈山百万衆前、拈ニ優曇華一瞬目、衆皆默然、唯迦葉尊者、破顔微笑、世尊云、吾有ニ正法眼蔵涅槃妙心、并以ニ僧伽裂衣、附ニ囑摩訶迦葉。(道元禪師撰『正法眼蔵仏道』『道元禪師全集』第一卷四七三頁 春秋社刊)

釈迦牟尼仏、西天竺国靈山会上、百万衆中、拈ニ優曇華華一瞬目、於レ時摩訶迦葉尊者、破顔微笑、釈迦牟尼仏言、吾有ニ正法眼蔵、涅槃妙心、附ニ囑摩訶迦葉。(道元禪師撰『正法眼蔵面授』『道元禪師全集』第二卷五四頁 春秋社刊)

〈参考〉

第一祖摩訶迦葉尊者因世尊拈華瞬目迦葉破顔微笑、世尊曰吾有正法眼蔵涅槃妙心付囑摩訶迦葉(中略)靈山会上ニシテ百万大衆前ニシテ世尊拈華瞬目ス皆心ヲ不知默然タリ時摩訶迦葉独破顔微笑シテ即示テ言吾正法眼蔵涅槃妙心アリ円妙無相ノ法門悉大迦葉ニ付囑スト(拙著『校注乾

祖師門下不立文字直指單伝シテ見性成仏シ將テ行ク故人ヲシテ直至ナルコトヲ知メントシテ單伝セシムルニ佗傍様ナシ（侍者編『伝光録』第九相

◎不是心不是仏、名付ントシテ又無形、故二達磨大師仮二名付テ見性ト云、又暫呼テ成仏ト云

舉。南泉參百丈涅槃和尚。丈問。從上諸聖還有不爲人說底法麼。和尚知

壁立千仞。還泉云有。落草了也。孟八郎作麼。便有恁麼事。丈云。作麼生是不爲人說底法。

看錯。試問。看。泉云。不是心。不是佛。不是物。漏逗不少。丈云。說

泉云。某甲只與麼。和尚作麼生。
賴值有轉身處。與
 長則長。短則短。

云。我又不是善知識。爭知有說不說。藏身露影。去死十分。不覺腳忙手亂。泉云。某甲云。

會。
賴午可值息應不會。
則賴值打老漢破息應。
丈云。我太愆爲汝說也。
頭雪上加霜蛇龍尾前什麼。
〔圓悟克

雪竇重顯『仏果碧巖破関撃節』上
拙著『影印 曹洞宗宗宝』
教行社刊

第二十七 不是心佛

南泉和尚、因僧問云、還有_下不_二與_レ人說_一底法_上麼、泉云、有、僧云、如

何是不_二與_レ人說_一底法、泉云、不是心、不是佛、不是物。

無門曰、南泉被_二者一問、直得揣_二盡家私_一、郎當不_レ少。

頌曰

叮嚀損_二君德_一、無言真有_レ功、任從滄海變、終不_二爲_レ君通_一。（無門慧開「無

門関
前掲書八〇頁

百丈涅槃和尚問「南泉、從上諸聖、還有不為人說底法麼、」泉曰、不是心・不是仏・不是物、師曰、說了也、泉曰、某甲祇恁麼、和尚又如何、師曰、我不是善知識、爭知有說不說、泉曰、某甲不_レ會、師曰、太煞為_レ汝說了也、(道元禪師撰『正法眼藏』下卷 河村孝道博士著『真字』正法眼藏 成立・編輯・伝写の様相 一六八頁 正法眼藏影印本刊行會刊)

上堂。挙。南泉示衆曰、江西和尚道、即心即仏。又道、非心非仏。我不_レ恁麼道。不_レ是心、不_レ是仏、不_レ是物。又道、心不_レ是仏、智不_レ是道。又道、平常心是道。師云、一員老漢既恁麼道、永平長老又不_レ恁麼道。吾且問_二于_一爾江西・南泉、這裏是什麼處在、說_レ心說_レ道、說_レ物說_レ仏、說_二非_一仏說_二非_一心。須_レ知、一片全無_二兩箇_一。十方独露山川知覺、不_レ是道仏性亦因縁。為_レ甚如_レ此。還_二来喫飯錢_一。畢竟如何。良久云、胡蘆藤種胡蘆纏。(懷井編『道元和尚広録』第四『道元禪師全集』第三卷二〇六頁)

阿羅漢担来諸法の正当恁麼時、この諸法まことに八両にあらず、半斤にあらず、不是心、不是仏、不是物なり、仏眼也覷不見なり。(道元禪師撰『正法眼藏阿羅漢』『道元禪師全集』第一卷四〇五頁 春秋社刊)

祖師西来意、かならずしも正法眼藏涅槃妙心にあらざるなり。不是心なり、不是仏なり、不是物なり。(道元禪師撰『正法眼藏柏樹子』前掲書四二九頁)

◎永嘉真覺大師云ク、住相布施ハ生天ノ福、猶向_レ虚空如_レ射矢、勢力

尽矢_レ歸落。来生不如意招得

住相不_レ施生天福、猶如仰箭射虚空、勢力尽_レ箭還墜、招得_二来生不如意_一玄覺撰『永嘉証道歌』『大正新脩大藏經』四八 三九六上 大正一切経刊行會刊)

◎寒山ノ云ク、四時無_レ止息、年去又年来、万物有_二代_一謝、九天亦無_レ摧、東明亦西暗、花花落又花開、唯有_二黄泉客_一、冥々去不同、

四時無止、年去又年来、萬物有代謝、九天無朽摧、東明又西暗、花落復花開、唯有黄泉客、冥冥去不廻(『寒山詩』入谷仙介著『禪の語録』13 筑摩書房刊)

◎汝等只今生不_レ了者、又何_レノ時ニカ待_レ真ヲ、一大事因縁ヲ明メン、此事モシ明メント思ワ、自受用三昧シクヘカラス、自受用三昧者、是坐禪ナリ

諸仏如来、ともに妙法を単伝して、阿耨菩提を証するに、最上無為の妙術あり。これ、ただほとけ、仏にさづけてよこしまなることなきは、すなはち自受用三昧、その標準なり。この三昧に遊化するに、端坐參禪を正門とせり。(中略) 仏法を住持せし諸祖ならびに諸仏、ともに自受用三昧に端坐依行するを、その開悟のまさしきみちとせり。西天東地、さとりをえし人、その風にしたがへり。これ、師資ひそかに妙術を正伝し、真訣を稟持せしによりてなり。(道元禪師撰『辨道話』前掲書第二

〈参考〉

有寂靜有漏妙術、是謂坐禪、即是諸仏自受用三昧、又謂三昧王三昧、若一時安住、此三昧、則直開明心地（中略）只安住諸仏自受用三昧、遊戲菩薩四安樂行、是豈不仏祖深妙之行乎、或雖説証、無証而証、是三昧王三昧（鑒山禪師『坐禪用心記』初版『常濟大師全集』二四四頁 大本山總持寺藏版）

上堂。其坐禪者。大安樂法門。大解脫妙法也。人人以心伝心之心印。箇々以法授法之表準。智愚無別。凡聖不隔。盡安住自受用三昧。齊入光明藏三昧。從本離心意識之運轉。更作作念想觀之測量。諸人識取麼未也。山僧代也。欲一轉語。大衆要聽麼。良久曰。不思量而現。不回互而成。（源祖編『鑒山瑾禪師語錄』 前掲全集四六五頁）

◎妻子親屬モ、長ニ親ニアラス、如是觀シテ閑床ニ潜力ニ至テ、破蒲団ノ上ニ、端坐スル時、身心共に脱落ス

上堂。先師示衆云、參禪者身心脱落也。大衆、還要委悉麼道理麼。良久云、端坐身心脱落、祖師鼻孔空華。正伝壁觀三昧、後代兒孫説邪。（懷祥編『道元和尚広録』第四 前掲書第三卷二〇六頁）

昔六祖慧能大師五祖黃梅ノ會ニ投シテ、夜半ニ心印ヲ印證セラレ、同

ク金襴衣ヲ傳授シテ、大庾嶺ヲ三更ニ渡ル、五祖六祖ノ跡ヲ指テ云ク、吾法終ル、又其後黃梅首座神秀、道明上座ヲツカワシテ、衣鉢ヲ奪取ントス、磐石ノ如シテ舉ル事不得、道明懺悔シテ云ク、我來爲佛法、爲衣鉢不來、但願ハ行者爲吾開示シ玉へ、六祖石上ニ坐シテ、直下ニ説法云ク、不思善不思惡、正當恁麼時、明上座之父母未生以前、本來面目、我還來レ、明上座ノ云ク、如何是如何是蜜、祖云、若先云カ如クナラハ、蜜ハ汝力邊ニ有リ、明上座豁然、大悟、禮ヲ作シテ云ク、我三十年黃梅ノ會裏ニ有テ、枉テ工夫ヲ用フ、今日眼病ノ汗ヲ得ルカ如シ、眞ニ知ル不思善不思惡ノ時、本來ノ面目アラワレ來ル事ヲ

袁州蒙山道明禪師者鄱陽人陳宣帝之裔孫也國亡落於民間以其王孫嘗受署因有將軍之號少於永昌寺出家慕道頗切往依五祖法會極意研尋初無解悟及聞五祖密付衣法與盧行者即率同意數十人躡跡追逐至大庾嶺師最先見餘輩未及盧行者見師奔即擲衣鉢於磐石曰此衣表信可力爭耶任君將去師遂舉之如山不動踟躕悚慄乃曰我來求法非爲衣也願行者開示於我祖曰不思善不思惡正恁麼時阿那箇是明上座本來面目師當下大悟徧體汗流泣禮數拜問曰上來密語密意外還更別有意旨否祖曰我今與汝說者即非密也汝若返照自己面目密却在汝邊師曰某甲雖在黃梅隨衆實未省自己面目今蒙指授入處如人飲水冷暖自知今行者即是某甲師也祖曰汝若如是則是吾與汝同師黃梅善自護持師又問某甲向後宜往何所祖曰逢袁可止遇蒙即居禮謝遽廻至嶺下謂衆人曰向陟崔嵬遠望杳無蹤迹當別道尋之皆以爲然師既廻遂獨往廬山布水臺經三載後始往袁州蒙山大唱玄化初名慧明以避師

上字故名道明弟子等盡遣過嶺南參禮六祖（道原撰『景德伝燈録』卷四 七三頁
新文豐出版公司刊）

袁州蒙山道明禪師者鄱陽人陳宣帝之裔孫也國亡落於民間以其王孫嘗受
署因有將軍之號少於永昌寺出家慕道頗切往依五祖法會極意研尋初無解
悟及聞五祖密付衣法與盧行者即率同心數十人躡迹追逐大庾嶺師最先
見餘輩未及盧見師奔至即擲衣鉢於盤石曰此衣表信可力爭耶任君將去師
遂舉之如山不同踟躕悚慄乃曰我來求法非爲衣也願行者開示於我盧祖曰
不思善不思惡正恁麼時阿那箇是明上座本來面目師當下大悟徧體汗流泣
禮數拜問曰上來密語密意外還更別有旨否號曰我今與汝說者即非密也
汝若返照自己面目密却在汝邊師曰某甲雖在黃梅隨衆實未省自己面目今
蒙指授入處如人飲水冷暖自知今行者即是某甲師也盧曰汝若如是則是吾
與汝同師黃梅善自護持師又問某甲向後宜往何所盧曰逢袁可止遇蒙即居
禮謝遽回至嶺下謂衆人曰向陟崔嵬遠望杳無蹤迹當別道尋之皆以爲然師
既回遂獨往盧山布水臺經三載後始往袁州蒙山大唱玄化初名慧明以避六
祖上字故名道明弟子等盡遣過嶺南參禮六祖（普濟撰『五燈會元』第二 三二頁
新文豐出版公司刊）

◎曾祖永平開山和尚ノ云ク、不思量而現シ、不回互而成ス、此ノ心是
思量セサレハ、本分アラワレ、相メクラサレハ、心源成スルナリ

仏仏要機、祖祖機要。不思量而現、不回互而成。不思量而現、
其現自親。不回互而成、其成自証。其現自親、曾無二污染。其成自

証、曾無二正偏。曾無二污染之親、其親無レ委而脫落。曾無二正偏之
証、其証無レ因而功夫。水清徹地兮、魚行似魚。空闊徹天
兮、鳥飛如鳥。（道元禪師撰『正法眼藏坐禪篇』前掲全集第一卷 一一七頁）

（参考）

舉信心銘。

道二什麼。節目既顯。禍言一出。一人作虚。千人傳實。縱信得及。不レ免
捕影。縱銘得定。好肉上剗瘡。歷劫無名。誰喚爲心。渠豈受二名乎
得者。三世諸佛不レ得窺。六代祖師不レ得用。不レ見二銘得レ推
出。獨露。不思量而現。不回互而成。只是見聞學知。聲色去來。佛
面祖面。蠢動含靈。赤心片片。皮肉骨髓銘將來。（瑩山禪師『信心銘拈提』前
掲全集二〇八頁）

上堂云。參禪者身心脫落也。身無二所作。一心無二思量。不思量而現。
不回互而成。（源祖編『瑩山瑤禪師語錄』前掲全集四六四頁）

◎不見や御歌ニ云、心トテ人ニ見スヘキ、色ソナキ、但露霜ノムスフ
計リソ

心とて人に見すべき色をなきたた艶霜のむすふのみにて（宝慶寺本）

心トテ人ニ見スヘキ色ソナキ只露霜ノ結フノミ見テ（天正・元文両建
勘記・宗參寺・導故寺兩本）

心として人に見すへき色そなき唯た露霜の結ふのみ身を（元禄本建擲記）

心とて人に見すへき色そなきた露霜のむすふのみにて（宝慶寺本）
心とて人に見すへき色そなきた露霜のむすふのみして（湧金山本・

面山本）（大場南北著『道元禪師和歌集新釈』二七八頁—二七九頁 中山書房刊）

ちなみに、大場南北氏によれば、

「一首の結語「見て・身を・にて・して・計りぞ」の五種の中では、「計りぞ」が最も要を得たものと考えられる。この瑩山和尚法語によると、一首を掲げたあとに続けて「露しもとは、秋暮れ冬来るとき、露ならず、霜ならざる者あり、是そのつゆじもと云」と語釈がある。

この解釈は正しいものである。露は空中の湿度の結んだもの、霜は土中の湿潤が地上に滲み上つて結んだものであるが、つゆじもは、物の上の露のごとつて霜と見えるもので、みずじものことである」ということである。（前掲書）

いずれにせよ、この法語のなかに出てくる道元禪師の和歌は結句に限っていえば、すでに知られている和歌とは別系統で伝わったものということにもなるうか。

◎曾祖和尚云ク、寒炉無_レ火独臥_二虚堂_一冷夜無_レ燈空坐_二明窓_一

南岳大慧禪師懷護和尚そのかみ（中略）寒炉に炭なく、ひとり虚堂にふせり。涼夜に燭なく、ひとり明窓に坐する。（道元禪師撰『正法眼藏行持』上

前掲全集第一巻 一六四頁—一六五頁）

（注。ちなみに、かつて、私は拙著『現代語訳 伝光録』（三一頁）で、『洞谷開山瑩山和尚之法語』の中に、「曾祖和尚云ク、寒炉無_レ火独臥_二虚堂_一冷夜無_レ燈空坐_二明窓_一」とあります。曾祖和尚というのは道元禪師を指すのでありますが、この漢詩は、はたして道元禪師の作品であるのかどうか、今は杳として知れないのであります。」

と述べた。重複するが、『正法眼藏行持』の巻に酷似する文章である。しかし、「行持」の巻の文章は八字二句の漢詩ではなく、三〇字にわたる漢字仮名まじりの形式である。また火と炭、燈と燭の文字の差異がある。しかし、両者はほとんど同趣旨の文章といつてよい。そこで、この両者の関係はどのようにうけとめればよいか。また、果して、この文は、曾祖すなわち道元禪師の作品なのかどうか。今後の課題の一つであることを重ねて指摘しておく）

◎又不_レ見阿難當年廿年佛侍者タリ、一代ノ説教、悉ク能持テ、末代ノ今ニ流傳セリ、佛法若教法ノ中ニ有_レラハ、阿難先ツ會スヘシ、佛既入涅槃ノ後、阿難問_レ迦葉云、世尊傳_レ金襴衣ヨリ外、別傳_レ何物、迦葉呼_レ阿難阿難應諾ス、迦葉ノ云門前ノ刹竿ヲ倒却著セヨ、阿難豁然トシテ大悟、爰以迦葉ノ付法ノ弟子ト成ル、豈以教法中ニ有_レ佛法乎、阿難ハ嗣_二法於迦葉_一成_レ弟子明ケシ、正法ハ悟_レ心有リ、曾教意ノ中ニアラス、更ニ可疑乎、

上堂。記得。阿難問_二迦葉_一。師兄伝_二仏金襴袈裟_一外、別伝_二箇甚麼_一。迦葉召_二阿難_一。阿難応諾。迦葉云、倒_二却門前刹竿_一著。大衆要_レ會_二這箇

道理一麼。良久云、喚応弟兄同一声。抽釘未了還拔楔。倒却門前刹竿一著、今作誰家乾屎橛。(懷辨編『道元和尚広録』第三 前掲全集第三卷一六八頁)

教家道、是法不可示、言辭相寂滅。如何是辭相、如何是寂滅。便曰、是法則言辭相也、寂滅相也。向上說話、頂門開眼得真觀矣。昔阿難尊者、参迦葉尊者便問、師兄伝如来金襴法衣外、更伝箇什麼。迦葉云、阿難。阿難応諾。迦葉云、倒却門前刹竿一著。聞此阿難便大悟。(懷辨等編『道元和尚広録』第八 前掲全集第四卷一四六頁)

ちなみに、『瑩山禪』第一〇卷は、渉典において、「問迦葉曰、師兄世尊伝金襴袈裟外、別箇麼。迦葉召阿難、阿難応諾。迦葉曰、倒却門前刹竿一著」(会元四左下)また、『会要』も類似するが、何れにも「阿難大悟」のことは無い。(同書二四頁)と述べているが、「阿難大悟」のことは、右に掲示したとおり、『道元和尚広録』第八卷には、「阿難便大悟」とはつきり出ている。したがって、この法語で、瑩山禪師は「五燈会元」や『聯燈会要』を引用したのではなく、道元禪師の『道元和尚広録』第八卷を引用したのである。なお、後述の「参考」で掲げるとおり、『伝光録』も「阿難大悟」説となっている。

〈参考〉

第二祖阿難陀尊者問迦葉尊者云師兄傳金襴袈裟外別傳ケ什麼迦葉召阿難々々應諾迦葉云倒却門前刹竿着阿難大悟(侍者編『伝光録』第二祖阿難陀尊

者章 前掲拙著八頁)

◎其後一千二百餘歳、唐肅宗上元二年自西天大耳三藏云モノ來、自稱云得他心通、南陽ノ忠國師他ニ向テ三度問フ、老僧即今什麼處ニカ在ル、第三度ニ至テ三藏茫然トシテ國師ノ所在ヲ不知、國師呼云、這野狐精、他心通何處ニカアル、阿難當年既不知、三藏亦不得、何況末代ニヲイテヲヤ、教師論師ノ間、誰人カ得佛意、若又是ヲ知得スト云ハ、佛法ヲ謗スルナラン、可畏々々

西京光宅寺慧忠國師者、越州諸暨人也。姓冉氏。自受心印、居南陽白崖山党子谷、四十余祀、不下山門。道行聞于帝里。唐肅宗上元二年、勅中使孫朝進、齎詔徵赴京。待以師礼。勅居千福寺西禅院。及代宗臨御、復迎止。光宅精藍十有六載、隨機說法。時有西天大耳三藏、到京云、得他慧眼。帝勅令与國師一試驗。上三藏才見師便禮拜、立千右辺。師問曰、汝得他心通耶。对云、不敢。師曰、汝道、老僧即今在什麼處。三藏曰、和尚是一國之師、何得却在天津橋上看。弄獼猴。師第三問、汝道、老僧即今在什麼處。三藏良久、罔知去處。師曰、遮野狐精、他心通在什麼處。三藏無对。

僧問趙州曰、大耳三藏、第三度、不見國師在處、未審國師在什麼處。趙州云、在三藏鼻孔上。僧問玄沙、既在鼻孔上、為什麼不見。玄沙云、只為太近。僧問仰山曰、大耳三藏、第三度、為什麼

不見^ル二国師^一。仰山曰^ク、前^ニ兩度^ハ是^レ涉^{ナリ}境^ニ心^一、後^ニ入^ニ自^ニ受^ニ用^ニ三昧^一、所以^ニ不^レ見^一。海会端曰^ク、国師若在^ニ三藏鼻孔^一上^ニ、有^ニ什麼^一難^ニ見^一。殊^ニ不^レ知^一、国師在^ニ三藏眼晴裏^一。玄沙徵^ニ三藏^一曰^ク、汝道^ニ前^ニ兩度^ハ還^ニ見^一麼^一。雪竇明覺重顯禪師曰^ク、敗也敗也。(道元禪師撰『正法眼藏他心通』 前掲全集第二卷二四一頁 二四二頁)

又、大証国師のとき、大耳三藏、はるかに西天より到京せり。他心通をえたりと講ず。唐の肅宗皇帝、ちなみに国師に命じて試験せしむるに、三藏わづかに国師をみて、速に礼拝して右にたつ。国師つひに問、なんぢ、他心通を得りやいなや。三藏まうす、不敢、と。国師の云、汝云ふべし、老僧、今いづれの、処にか在る。三藏まうす、和尚、是一国の師也、なんぞ西川に行て競渡のふねをみる。国師ややくして再問す、なんぢ云べし、老僧、今何処にか在る。三藏まうす、和尚は一国の師也、なんぞ天津橋の上に行て、獼猴を弄するをみる。国師又問、汝云べし、老僧、今何処にか在る。三藏、やや久く在れ共、しることなし、みるところなし。国師、ちなみに叱して云、この野狐精、汝が他心通、何の処にかある。三藏、又祇対なし。

かくのごとくの事と、しられればあし、きかざればあやしみぬべし。仏祖と三藏とひとしかるべからず、天地懸隔なり。仏祖は、仏法をあきらめてあり、三藏は、いまだあきらめず。まことにそれ三藏は、在俗も三藏なることあり。たとへば文華にところをえたらんがごとし。然あれば、ひろく竺漢の言音をあきらめてあるのみにあらず、他心通をも修得せりと云へども、仏道の身心におきては、ゆめにもいまだみ

ざるゆえに、仏祖の位に証せる国師にまみゆるには、すなはち勘破せらるるなり。いはゆる仏道に心をならふには、万法即ち心なり、三界唯心なり。唯心これ唯心なるべし、是仏即心なるべし。たとひ自なりとも、たとひ他なりとも、仏道の心をあやまらざるべし。いたづらに西川に流落すべからず、天津橋におもひわたるべからず。仏道の身心を保任すべくは、仏道の智通を学習すべし。

いはゆる仏道には、尽地みな心なり、起滅にあらたまらず。尽法みな心なり、尽心を智通とも学すべし。三藏すでにこれをみず、野狐の精のみなり。然あれば、已前兩度も、いまだ国師の心をみず、国師の心に通ずることなし。いたづらなる西川と天津と、競渡・獼猴とのみにたはむる野狐子なり、いかにしてか国師を見ん。又、国師の在処をみるべからざる道理、あきらけし。老僧今いづれの処にかある、と三たび問に、このことばをきかず。若しきくことあらば、たづぬべし、きかざれば、蹉過するなり。三藏、若し仏法をならふことありせば、国師のことばをきかまし、国師の身心をみることあらまし。ひごろ仏法をならはざるが故に、人中・天上の導師にうまれあふといへども、いたづらにすぎぬるなり、あはれむべし、かなしむべし。おほよそ三藏の学者、いかでか仏祖の行履におよばん、国師の辺際をしらん。況や、西天の論師および竺乾三藏、たえて国師の行履をしるべからず。三藏のしらんことは、天帝もしるべし、論師もしるべし。論師・天帝しらんこと、補処の智力およびざらんや、十聖三賢も、およばざらんや。国師の身心は、天帝もしるべからず、補処もいまだあきらめざる也。身心を仏家に論ずること、かくのごとし。しるべし、信ずべし。

我が大師釈尊の法、いまだ二乗・外道等の野狐の精には、おなじからざるなり。

然あるに、この一段の因縁、ふるくより諸代の尊宿のおの参究するに、その話、のこれり。

僧ありて趙州にとふ、三蔵、なにとしてか第三度に国師の所在をみざる。趙州云、国師在三蔵鼻孔上、所以不見へ趙州云く、国師、三蔵の鼻孔上に在り、所以に見ず。又僧ありて玄沙問、既鼻孔上、為甚不見。玄沙云、只為太近。海会端云、国師若在三蔵鼻孔上、有甚麼難。玄沙に問う、既に鼻孔上なり、甚として見ざる。玄沙云く、只だ太だ近きがためなり。海会の端云く、国師若し三蔵の鼻孔上に在らば、什麼の難きことあらん。又、玄沙、三蔵を徴して云く、汝道、前兩度還見麼。雪竇頌云、敗也、敗也。又、僧ありて仰山に問、第三度、なにとしてか、三蔵ややひさしくあれど国師の所在をみざる。仰山云、前兩度は涉境心、後入自受用三昧、所以不見へ仰山云く、前の兩度は是れ涉境心、後は自受用三昧に入る。所以に見ず。(道元禪師撰『正法眼藏』別本心不可得 前掲全集第二卷五〇二頁—五〇四頁)

上堂。拳三忠国師驗大耳三蔵他心通、又拳仰山・玄沙・玄覺・趙州了、師乃云、国師如何最初不下向三蔵道、得幾枚他心通、只得他心通、更得、自心通也無。若恁麼道、三蔵豈不茫然耶。五位尊宿俱以第三度為不見也。殊不知、前兩度也不見得。若將三蔵二乘通而為二仏祖之他心通、五位尊宿未免二乘之窠窟、猶在三蔵之偏局也。要會二仏祖通麼。自心他心兮、全殺全活。乃通乃變兮、盪水点茶。

(詮慧編『道元和尚広録』第一卷 前掲全集第三卷一四頁)

上堂。拳大証国師試驗大耳三蔵因縁了、師乃云。這一段因縁、多少人拈来。有僧問趙州曰、大耳三蔵第三度不見国師在処、未審国師在什麼処。趙州云、在三蔵鼻孔上。僧問玄沙。既在鼻孔上、為什麼不見。玄沙云、只為太近。僧問仰山曰、大耳三蔵第三度為什麼不見国師。仰山曰、前兩度は涉境心、後入自受用三昧。所以不見。海会端曰、国師若在三蔵鼻孔上、有什麼難見。殊不知、国師在三蔵眼晴裏。玄沙徴三蔵曰、汝道、前兩度還見麼。雪竇頌曰、敗也敗也。(懷辨編『道元和尚広録』第三卷 前掲全集一三三頁—一三四頁)

西天大耳三蔵到京云、得他心慧眼。代宗皇帝、勅令与慧忠他国師試驗。三蔵纔見師、便禮拜、立千右辺。国師問曰、汝得他心通邪。対曰、不敢。国師曰、汝道、老僧即今在什麼処。曰、和尚是一国之師、何得却去西川看競渡。国師再問、汝道、老僧即今在什麼処。曰、和尚是一国之師、何得却去天津橋上看弄獼猴。国師第二問、語亦同前。三蔵吉久罔知去処。国師叱曰、這野狐精、他心通在什麼処。三蔵無對。(詮慧等編『道元和尚広録』第九 前掲全集第四卷一九八頁—二〇〇頁)

◎見や、永嘉大師云、若以妄語誑衆生、自ラ招拔舌塵沙劫、爰以智恵有才ノ人、一人モ此宗ニ不入ナシ

若、將、妄、語、誑、衆、生、自、招、拔、舌、塵、沙、劫、(玄覺撰『永嘉証道歌』大正新脩大藏經四八 三九五下 大正一切經刊行會刊)

訳『金剛般若波羅蜜經』大正新脩大藏經四八 七五二上 四八 七五六中

◎故二三祖大師云、十方智者皆入此宗、又殊可憐類イアリ

十方智者、皆入此宗(鑑智僧璨撰『信心銘』大正新脩大藏經四八 三七七上 大正一切經刊行會刊)

◎遙二他土ノ往生ヲ願テ、心ヲ西方ニ投シテ、口ヲ喧シク手足ヲ狂亂ス、不見ヤ佛言心外求法、是謂外道

亦讀經念佛等ノ勤メテウル所ノ功德ヲ、汝計リ知ルヤ、只是レ舌ヲ動シ、音ヲアクレハ、佛事功德ト思ヘル、イトハカナシ、「讀經念佛ヲ勸ムル事ハ、是ニヨリテ、下根劣智ノ輩ヲシテ、無作三昧ヲ心地ニ發得セシメン爲ナリ、」徒ニ春ノ田ノ蝦ノコトク、無隙聲ヲアケテモ、終ニ無益トニハアラス、「此レ等ノ人ハ佛法ニハウタ、遠ク彌ヨ遙ナリ、佛智ヲ得ル事、必シモ有心無心ノチカラニアラヌナリ、(正法寺藏『辨道話』第四紙左)

金剛經ニ云、若シ以色見我、以音声求我、是人行邪道、不能見如来

若、以、色、見、我、以、音、聲、求、我、是、人、行、邪、道、不、能、見、如、來、(鳩摩羅什訳。菩提流支

◎或ハ一則之公案ト云テ、古德ノ言説ヲ胸次ニ含テ不レ放捨、時々着纏心頭、待ニ透徹、期アリ、可笑待悟爲足ノ病ナリ

近日大宋国禪子等はいはく、悟道是本期。かくのごとくいひて、いたづらに待悟す。しかあれども、仏祖の光明にてらされざるがごとし。ただ真善知識に参取すべきを、懶墮にして蹉過するなり。古仏の出世にも度脱せざりぬべし。(道元禪師撰『正法眼藏大悟』前掲全集第一卷 九七頁—九八頁)

〈参考〉

獨覺聖者十千劫ヘテ菩薩道入善因終歸ト云トモ恨是因テ輪轉ノ業ナヲタエス又是繩牽挽スルニ似ク本解脱ノ人非實ニ夫八十八支見思塵沙無明惑破シテ纖塵留ヘキナク一毫或ナシト云トモ徒有為功業トシテ終無漏佛果ニアラス然ニ本ニカエリ源ニ皈ル修習待悟為則ノ辨道悉皆是ニ類ス故諸人者無ヲモ要スルコトナカレ恐クハ落空亡ノ外道ニ同ツヘシ

(侍者編『伝光録』第六祖弥遮迦尊者章 前掲拙著一六頁)

夫坐禪者、非ニ干ニ教行証、而兼ニ此三德、謂證者、以待レ悟為、則、不ニ是坐禪心。(瑩山禪師『坐禪用心記』 前掲全集二四七頁)

◎枯木石頭ノ如ク、無心ノ所是ナリト云テ、万事ヲ不レ受、如レ是心機来レ

転、是之總不是ノ痛ナリ

枯木死灰の談は、もとより外道の所教なり。(道元禪師撰『正法眼藏竜吟』前掲全集第二卷 一五一頁)

◎天是天、地是地、山是山、水是水、是法々自位ニ住シテ、錯ル所ナシ、謂レ之是法、住法、法位、世間相常住、ヲノレノ現成ナリ、此何ヲカ修セントテ、更ニ坐禪辨道ノ心無キ、是尤可憐、自然見ノ外道ナリ

後学かならず、自然見の外道に同ずることなかれ。百丈大智禪師のいはく。若執ニ本清浄本解脱自是仏、自是禪道解者、即属ニ自然外道(道元禪師撰『正法眼藏身心学道』前掲全集第一卷四九頁)

莊子曰、貴賤苦樂、是非得失、皆是自然。この見すでに西国の自然見の外道の流類なり。(道元禪師撰『正法眼藏四禪比丘』前掲全集第二卷四三〇頁)

〈参考〉

佛道何ナルヘシトモ曾セス只春ノ花開ヲ見秋葉散ヲ見法住法位思ヘリ是笑ニ堪タル物也佛法如是ナラハ何因釈迦出世シ達磨西來セン(侍者編『伝光録』第八祖仏陀難提尊者章 拙著『校注 乾坤院本伝光録』二〇頁 隣人社刊)

◎玄沙云学道ノ人不レ知レ真只為レ認ニ従前ノ識神ニ無量劫來生死ノ本、癡人喚テ作ニ本来人

この法語では、中国唐代の禪僧玄沙師備(八三五一九〇八。雪峰義存の法嗣)の語としてゐるが、『景德伝燈録』や『五燈会元』では長沙景岑(八六八寂。南泉普願の法嗣)の語としてゐる。これによるかぎり長い間長沙景岑の語とされてきてゐるのである。すなわち、

有偈曰、学道之人不識真、只為認從來認識神、無始劫來生死本、癡人喚作本来身(『景德伝燈録』卷十 前掲書七二頁)

有偈曰、学道之人不識真、祇從來認識神、無始劫來生死本、癡人喚作本来人(『五燈会元』卷四。前掲書八四頁)

のとおりである。

なお、参考までに添えておくと、『円悟仏果禪師語録』卷第十二に古人の語として「所謂学道之人不識真、只為従前認識神、無量劫來生死本、癡人喚作本来人(大正蔵四七・七六八上)が収めてある。

ちなみに、右の『五燈会元』を引いたとおもわれるのが、道元禪師の『道元和尚広録』(永平広録)真字『正法眼藏』である。以下のとおりである。

上堂。挙。竺尚書問ニ長沙。蚯蚓斬為ニ兩段。未審、仏性在ニ阿那箇頭。沙伝、莫ニ妄想。書云、争ニ奈動一何。沙云、只為ニ風火未散。乃至癡人喚作ニ本来人。(懷辨編『道元和尚広録』第四 前掲全集第三卷二一四頁)

竺尚書問ニ長沙岑和尚。蚯蚓斬為ニ兩段。兩頭俱動。未審、仏性在ニ阿那箇頭。沙云、莫ニ妄想。書云、争ニ奈動一何。沙云、只為風火未散。書無レ

対。沙喚_二尚書_一。書応諾。沙云、不_二是尚書本命_一。書云、不_レ可_下離_二却即_上今祇対_一有_中第二箇主人公_上也。沙伝、不_レ可_下喚_二尚書_一作_中今上_上也。書曰、与麼則總不_レ祇対和尚、莫_二是弟子主人公_一否。沙云、非_四但祇対_三不_レ祇対老僧_一、從_二無始劫_一来、是箇生死根本。乃示_レ頌云、学道之人不_レ識_レ真、祇為從來認_レ識神、無始劫来生死本、癡人喚作_二本来人_一。(道元禪師『道元和尚広録』第七 前掲全集第四卷八八頁—八九頁)

長沙、因竺_二尚書問_一、蚯蚓斬為_二兩段_一。兩頭俱動、未審、仏性在_二阿那箇頭_一。沙云、莫_二妄想_一。書曰、争_二奈動_一何。沙云、会、即風火未散。書無_レ対。沙却喚_二尚書_一。書応諾。沙云、不_二是尚書本命_一。書曰、不_レ可_下離_二却即今祇対_一有_中第二箇主人公_上也。沙云、不_レ可_下喚_二尚書_一作_中今上_上也。書曰、与麼則總不_レ祇対和尚、莫_二是弟子主人公_一否。沙云、非_四但祇対_三不_レ祇対老僧_一、從_二無始劫_一来、是箇生死本。乃示_レ頌云、学道之人不_レ識_レ真、祇為從來認_レ識神、無始劫来生死本、癡人喚作_二本来身_一。(註慧等編『道元和尚広録』第九 前掲全集第四卷二二六頁)

長沙景岑禪師、因竺_二尚書問_一、蚯蚓斬為_二兩段_一、兩頭俱動。未審仏性在_二阿那箇頭_一。師曰、莫_二妄想_一。書曰、争_二奈動_一何。師曰、会即風火未_レ散。書無_レ対。師却喚_二尚書_一。書応諾。師曰、不_二是尚書本命_一。書曰、不_レ可_下離_二却即今祇対_一有_中第二箇主人公_上也。師曰、不_レ可_下喚_二尚書_一作_中今上_上也。書曰、与麼則總不_レ祇対和尚、莫_二是弟子主人公_一否。師曰、非_四但祇対_三不_レ祇対老僧_一、從_二無始劫_一来、是箇生死根本。乃示_レ頌云、学道乃人不_レ識_レ真、祇為從來認_レ識神、無始劫来生死本、癡人喚作_二本来

來人。(道元禪師撰 真字『正法眼藏』上 前掲書八八頁—八九頁)

ひるがえって、この法語が収録している長沙の承句のなかの「只」字に視点を合わせると『景德伝燈録』『道元和尚広録』第九を依用しているようにうけとることが出来ようし、結句の「人」字に焦点をあてると『五燈会元』『道元和尚広録』第四、第七、真字『正法眼藏』上を引用しているということが出来よう。ところが、『瑩山禪』第一〇卷(一九頁)では、次のように「通釈」している。「玄沙師備(八三五—九〇八)は「学道の人が真実を知らないのは從前の識神を認めているのである」と言っている。無量劫来生死の本、痴かな人は(これを)喚んで本来人としている。」

この「通釈」は、まずこの法語が玄沙の語とする誤りをそのまま踏襲している。更に、起、承の前半の二句だけを玄沙の語としてあつかい、転、結の後半の二句は玄沙の語としてあつかっていないという不正確で不適切な処置を犯している。

◎不_レ見や、大唐_二憑相公_一ト云、ヘル人アリ、祖道_二長セリ、大官人ナリ、後_二作_レ頌云、公事之餘喜坐禪_一、少_二曾將_レ脇到_レ床眠_一、雖_二然現_一出宰官相、長老之名四海傳、是俗人タリト雖ヘトモ、祖道_二ニヤイチャウセル故_一ニ、大唐世舉_一、皆此人ヲ長老トイヘリ、尤も可_レ尊

近比_{チカ}大宋_二憑相公_一ト云アリキ、祖道_二ニ長セリ、大官ナリ、後_二詩ヲ作_一リテ自_ミヲ云ニ曰ク、公事之餘喜_二坐禪_一、少_二曾將_レ脇到_レ床眠_一、雖_二然現_一

出宰官相、長老之名四海傳、此レハ官務ニ際無キ身ナレトモ、佛道ニ志シ深ケレハ、得道セルナリ、他ヲ以テ我ヲ顧ミ、昔ヲ以テ今ヲカヘリミルヘシ、大宋國ニハ、今ノ世ノ國王・大臣・士俗・男女、共ニ心ヲ祖道ニト、メサルナシ、武門・文家、何レモ參禪學道ヲ心サセリ、志ス者、必ス心地ヲ開明スル事多シ、是レ世務ノ佛法ヲ妨ケサル、自カラ知レタリ、(正法寺藏 道元禪師撰『辨道話』『正法眼藏雜文』)

◎趙州ノ大叢林ト仰キモ、二十衆ニ不滿ナリ、汾陽ノ大叢林ト云モ、只五六衆ニス、明眼有道ノ衲子ナル故ニ、大唐是號ニ大叢林、佛法ノ昌隆セル故ニ、其如是、又楊岐ノ會ニ大叢林、小叢林ノ談有、縱五百人、千人ナリトモ、有道ノ人ナクンハ、是小叢林ナリ、縱ヘ又一ケ半ケナリトモ、明眼有道ノ人ノ所在、是大叢林ト可謂ナリ

衆のすくなきに、はばかりること莫れ。身、初心なるを顧ことなかれ。汾陽は纔に六七人、葉山は十衆に満ざる也。然れども仏祖の道を行じて、是を叢林のさかりなると云き(懷獎編『正法眼藏隨聞記』卷五 前掲全集第七卷一八頁)

正命道支とは、早朝粥・午時飯なり、在叢林弄精魂なり、曲木坐上直指なり。老趙州の不滿二十衆、これ正命の現成なり。葉山の不滿十衆、これ正命の命脈なり。汾陽の七八衆、これ正命のかかれるところなり。もちもちの邪命をはなれたるがゆえに。(道元禪師撰『正法眼藏三十七品菩提分

法 前掲全集第二卷一四八頁

晚間上堂。云。先來慈明口禪師會、有大叢林・小叢林之論。雖是先德之論、猶欠一隻眼。且道、喚甚麼作大叢林、喚甚麼作小叢林。不_レ可_レ以_レ衆多院闊_レ為_レ大叢林。不_レ可_レ以_レ院小衆寡_レ為_レ小叢林。縱衆多如無道人、實是小叢林也。縱院小如有道人、實是大叢林也。不_レ以_レ人多衆聚_レ為_レ國、以_レ有_レ一聖一賢_レ為_レ國也。人之家亦復如是。仏祖大叢林、必有_レ晚參。因_レ茲汾陽善昭禪師會、其衆只七八人也。

雖然常行_レ晚參、乃勝躅也。趙州不滿_レ二十衆、乃大叢林也。葉山不滿_レ三十衆、最大叢林也。近代雖_レ聚_レ會五百七百乃一千僧、豈為_レ大叢林、而比_レ葉山・趙州・汾陽等之會_レ者哉。所以無_レ一箇半箇道人_レ也。所以席主又不_レ可_レ比_レ葉山・趙州・汾陽等_レ也。所以近代斷無_レ晚參_レ矣。先師天童出世、乃千載一遇也。不_レ拘_レ澆運之軌則、或半夜、或晚間、或齋罷、總不_レ拘_レ時節、或擊_レ入室鼓、乃普說。或擊_レ小參鼓、乃入室。或自手打_レ僧堂槌_レ三下、在_レ照堂_レ普說。普說了入室。或打_レ首座寮前板、就_レ首座寮_レ普說。普說了入室。乃希代之勝躅也。今大仏既為_レ天童之子、亦行_レ晚參、是則我朝之最初也。記得。丹霞和尚拳。德山示衆云、我宗無_レ語句、亦無_レ一法_レ與人。德山恁麼道、只是入_レ草求_レ人、不_レ覺_レ通身泥水。子細觀來只具_レ一隻眼。若是丹霞即不_レ然。我宗有_レ語句。金刀剪不_レ開。玄玄深妙旨、玉女夜懷胎。師云、丹霞恁麼道得。眼睛照_レ破蓋_レ德山、笑_レ殺古今等閑仏祖。雖_レ然如是、若是大仏即不_レ然。大衆要_レ聽_レ大仏道_レ麼。良久云、我宗唯語句。眼口競頭開。拈出為人處、驢胎与_レ馬胎。(懷獎編『道元和尚広録』第二 前掲全集第三卷七一頁一七四頁)

監院之職、為公是務。所謂為公者無私曲也。無私曲者、稽古慕道也。慕道以順道也。先看清規而明通局、以道為念而行事。臨行事時、必與諸知事商議、然後行事。事無大小、與人商議而乃行事、則為公也。雖商議不容他語、不如不議。監院容眾為務、安眾是期。然而眾多未可為重。眾少未可為輕也。所以者何、調達之誘五百之眾、果為逆。外道之領巨多之眾、尽是邪也。葉山乃古仙也。眾不滿十眾之眾。趙州亦古仙也。眾不滿二十眾之眾。汾陽纔七八眾而已。頃嘗俱是仙祖之與大龍、非有限眾矣。只可貴有道。不可務繁眾。而今而後、有道有德、葉山之下也、汾陽之後也。可貴葉山之家風。可慕汾陽之勝蹟。須知縱百千萬眾、如下無道心、無稽古、劣於蝦蟇、劣於蚯蚓。縱七八九眾、如下有道心、有稽古、勝於龍象、勝於聖賢。所謂道心者、不拋撒于仙祖之大道、深護惜于仙祖之大道。所以名利拋來、家鄉辭去、比黃金於糞土、比聲譽於涕唾、不瞞於真、不順於偽、護規繩之曲直、任法度之進退。遂不下以仙祖家常之茶飯而弄於賤價、乃道心也。(道元禪師撰『日本国越前永平寺知事清規』前掲全集第六卷一三二頁)

◎灌溪志閑禪師至末山、末山トハ比丘尼ナリ、大愚ノ子ナリ、見解不劣師、末山見志閑來、問云、近離什麼處ヨリ來、師云路口、末山云汝何不蓋却來、師無語、師是ヨリ隨テ作資師禮、參禪學道ス、閑問テ云、如何是末山、山云末山頂ヲ不顯、閑云如何是山中ノ主、山云男女等ノ相ニアラス、閑云何變シ不去、山云是野狐精ニアラス、コノ何ヲ力變シ、依此信伏シテ、園頭ヲツトムル事三年、閑禪

師後出世シテ、語衆云、吾臨濟爺ノ處ニシテ、半杓ヲ得、末山嬢ノ處ニシテ半杓ヲ得共ニ一杓ニツクリテ、喫シ了テ、直至如今飽餉々ナリ

前高安大愚禪師法嗣

筠州末山尼了然灌溪閑和尚遊方時到山先云若相當即住不然則推倒禪牀乃入堂內然遺侍者問上座遊山來為佛法來閑云為佛法來然乃升座閑上參然問上座今日離何處閑曰離路口然云何不蓋却。閑無對。禾山代云々爭始禮拜問如何是末山然云不露頂閑云如何是末山主然曰非男女相閑乃喝云何不變去然云不是神不是鬼變箇甚麼閑於是伏元伏玉。膺作園頭三載僧到參然云大纏縷生僧云雖然如此且是師子兒然云既是師子兒為甚被文殊騎僧無對僧問如何是古佛心然云世界傾壞曰世界為甚麼傾壞然云寧無我身。(道原撰『景德傳燈錄』第一〇前掲書一九頁)

高安大愚禪師法嗣

瑞州末山尼了然禪師因灌谿閑和尚到曰若相當即住不然即推倒禪牀便入堂內師遣侍者問上座遊山來為佛法來溪曰為佛法來師乃陞座溪上參師問上座今日離何處曰路口師曰何不蓋却溪無對。禾山代云爭始禮拜問如何是末山師曰不露頂曰如何是末山主師曰非男女相溪乃喝曰何不變去師曰不是神不是鬼變箇甚麼溪於是伏膺作園頭三載僧到參師曰太纏縷生曰雖然如此且是師子兒師曰既是師子兒為甚麼被文殊騎僧無對問如何是古佛心師曰世界傾壞曰世界為甚麼傾壞師曰寧無我身。(普濟撰『五燈會元』卷四。前掲書九八頁)

震旦国の志閑禪師は、臨濟下の尊宿なり。臨濟ちなみに師のきたるをみて、とりとどむるに、師いはく、領也、臨濟はなちていはく、且放「你一頓」へ且く你に一頓を放さん。これより臨濟の子となれり。臨濟をはなれて末山にいたるに、末山とふ、近離甚處へ近離、甚の処ぞ。師いはく、路口。末山いはく、なんぢなんぞ蓋却しきたらざる。師、無語。すなはち礼拝して師資の礼をまうく。

師かへりて末山にとふ、いかならんかこれ末山。末山いはく、不露頂へ頂を露さず。師いはく、いかならんかこれ山中人。末山いはく、非男女等相へ男女等の相に非ず。師いはく、なんぢなんぞ変ぜざる。末山いはく、これ野狐精にあらず、なにをか変ぜん。師、礼拝す。つひに発心して園頭をつとむること、始終三年なり。

のちに出世せりし時、衆にしめしていはく、われ臨濟爺爺のところにして半杓を得しき、末山嬢嬢のところにして半杓を得しき。ともに一杓につくりて、喫しおはりて、直至「如今」飽餉餉へ直に如今に至つて飽くこと餉餉なり。

いまこの道をききて、昔日のあとを慕古するに、末山は高安大愚の神足なり、命脈ちからありて志閑の嬢となる。臨濟は黄檗運師の嫡嗣なり、功夫ちからありて志閑の爺となる。爺とは、ちち、といふなり。嬢とは、母、といふなり。志閑禪師の、末山尼了然を礼拝求法する、志氣の勝躑なり、晩学の慣節なり、撃閥破節といふべし。(道元禪師撰『正法眼藏礼拝得髓』 前掲全集第一卷三〇四頁—三〇五頁)

灌溪禪師住後上堂云、我在臨濟爺爺處得二半杓、末山嬢嬢處得二半杓。共成二一杓喫了。直至「如今」飽餉餉。

相二逢毒手二渾身苦、算二数眉毛二有幾茎、怨二自怨他猶未恨、魯連一箭更多情。(詮慧等編『道元和尚広録』第九 前掲全集第四卷二〇二頁)

灌谿志閑禪師、臨濟得處之後、離臨濟遊方時、到末山了然尼處。先云、若相当即住。不然則推倒禪牀。乃入堂内。師遣侍者問。上座遊山來、為二仏法一來。閑云、為二仏法一來。山乃陞座。閑上參。山問、今日離二什麼處。閑云、近離二路口。山云、何不蓋却了來。閑無對。始礼拝問、如何是末山。山云、不露頂。閑云、如何是末山主。山云、非二男女相。閑乃喝云、何不変去。山云、不是神、不是鬼、変箇什麼。閑於是礼拝、伏膺作二園頭三載。閑住院後、示衆云、我在臨濟爺爺處得二半杓、末山嬢嬢處得二半杓、共成二一杓喫了、直至「如今」飽餉餉。(道元禪師撰『日本国越前永平寺知事清規』 前掲全集第六卷一一八頁)

◎マウラウ居士陽太年府馬等は皆俗人タリト雖モ、大唐人尋師訪道、久不參者ナシ

「マウラウ居士」については、衛藤博士は、「法語の方に「又もうらう居士、陽太年、府馬等云云」とあるが、もうらう居士の假名音では思い當る居士がない。しかるに道元禪師が在俗の道人を擧げる時は、たとえば眼藏の三七七菩提分法の卷や、永平廣録第八のように、いつでも陽文公、李駙馬と並んで龐蘊居士が擧げ

られている。龐蘊は藥山禪師に参じて堂奥を許された有名な居士であるから、このもうらうは龐蘊の訛誤に相違ないと思う。」（前掲書四二頁—四三頁）とのべている。

士大丈夫、志願學道、参尋宗匠、莫得倉卒。當伝楊文公之家風、那無李駙馬之果實乎。裴休之投圭峰、還破泥団於黃檗、一呼之応諾。于迪之上紫玉、更彰光華於藥山全道之方便。琢磨于江西・石頭、分、龐公明於鏡磚之力、探問于光宅・耽源、分、肅宗弁王石之蹤、雖是先哲之行履、亦能晚進之照子也。（懷井等編『道元和尚広録』第八 前掲全集第四卷一七〇頁）

龐居士蘊公は、祖席の偉人なり（道元禪師撰『正法眼蔵神通』 前掲全集第一卷三九五頁）

襄州龐蘊居士祖馬 初問石頭、不下万法、為侶、侶者是什麼人、頭以手掩居士口、士於此豁然有省、又問馬祖、祖曰、待你一口吸尽西江水、来、即向你道、士言下領解、（道元禪師撰 真字『正法眼蔵』上 前掲書八三頁）

龐居士坐次、問靈照曰、古人道、明明百草頭、明明祖師意。你作麼生。照曰、老大大、作這箇話。士曰、你作麼生。照曰、明明百草頭、明明祖師意。士乃大笑。（道元禪師撰 真字『正法眼蔵』上 前掲書一一頁）

龐居士問馬祖曰、不昧本来人、請師高著眼、祖直下覷、士進曰、一種沒絃琴、唯師彈得妙、祖直上覷、士乃作礼、祖歸方丈、士隨後入曰、弄巧成拙、（道元禪師撰 真字『正法眼蔵』上 前掲書一二六頁）

◎不見円悟禪師ノ云、威音王已前、無師自悟、一法迢証シテ千聖途ヲ同ス、威音王已後、二至テ、自迢卓ノ処有テ、直下ニ承当シテ、無レ疑依師、決擇シ、印可セラレテ、法器ヲナサシムヘシ

威音王已前、無師自悟、則得、何故許他有超師之作、威音王已後、須因師打発、何故恐落天魔外道去（紹隆等編『円悟仏果禪師語録』卷第十 大正新脩大蔵經四七 七五七下 大正一切経刊行会刊）

威音王已前、無師自悟、是大解脫人、威音王已後、因師打発、不免立師立資（前掲書卷第十二 七六九中）

◎可レ知其正師ト云ヘルハ、正ニ佛心印ヲ傳授セル、知識ニ參學シ、正師ノ印可ヲ受タルヲ、眞正師ト云ナリ

夫正師者、不問年老者宿、唯明正法、分得正師之印証也。文字不レ為先、解会不レ為先、有格外之力量、有過節之志氣、不レ拘我見、不レ滯情識、行解相応是乃正師也。（道元禪師撰『永平初祖學道用心集』『道元禪師全集』第五卷二四頁 春秋社刊）

◎畢竟如何是衲僧超脫處、泣、露、千、般、草、吟、風、一、樣、松、

可笑寒山道、而無車馬蹤、聯谿難難記曲、疊嶂不知重、泣、露、千、般、草、
吟、風、一、樣、松、此時迷徑處、形問影何從、寒山詩 入谷仙介著『禪の語録』13 筑
松村 昂

摩書房刊)